
東方 ある家系からの幻想入り

たゆまゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 ある家系からの幻想入り

【Nコード】

N8694T

【作者名】

たゆまゆ

【あらすじ】

親に棄てられて孤児である少年

その少年はある家系のお嬢様に拾われる

そうして育てられる

その少年は今や青年へと成長した

青年になった彼は尊敬できる師匠を持ち血の繋がっていない義理の

妹も持った

そんな彼の物語りを覗いて見ませんか？

孤児である青年のお話（前書き）

駄作者が書く小説なんて嫌だ

キヤラ壊れなんて認めない超展開なことが時々起こるとかマジでないわ…

こんなストーリーの解釈は認めたくない

等に該当する方は戻るを押してまた小説探しをしましょう

読んでくれるのですか？

では

ゆっくりしていいね！！

孤児である青年のお話

親に棄てられて孤児である少年

その少年はある家系のお嬢様に拾われる

そうして育てられる

その少年は今や青年へと成長した

青年になった彼は尊敬できる師匠を持ち血の繋がっていない義理の妹も持った

そんな彼の物語りを覗いて見ませんか？

駄作者が書く小説なんて嫌だ

キャラ壊れなんて認めない超展開なことが時々起こるとかマジでないわ…

こんなストーリーの解釈は認めたくない

等に該当する方は戻るを押してまた小説探しをしましょう

読んでくれるのですか？

では

ゆっくりにっくにっねー！

ブローグ

俺の名は亮太。名字は無い
それは俺が孤児だからだ

数年前ある家計に拾われた者だ
その家のお嬢様に拾われたって言ったらしいのかな？
まあ取り敢えずお嬢様の両親からは酷く反対されてそれでも彼女は
俺を置いてくれた

「亮太？」

亮「何ですかお嬢様？」

「お嬢様じゃなくて名前で呼んでくれないかしら」

亮「無理です…立場的にも」

「そう…まあ、仕方ないわね。何かあったら言ってね？」

亮「はい」

そう言って彼女は家の中へと戻っていった
その後すぐに彼女とすれ違うように1人の少し年老いた男とまだ小さい女の子が歩いてきた

亮「お師匠？どうしたんですか？まだ剣の稽古の時間じゃないですよ？」

「ああ。知っている。こやつが会いたいって煩くてな。少し相手してやってくれるか？」

亮「ん？ああ、わかりました」

「ではよろしくな」

そして彼はこの場を後にした
残っているのは俺とこの子だけ

亮「よう。何するんだ？」

「えつとねゝ：剣の使い方を教えて！！」

亮「ええ！？ダメダメ！！まだお前には早いつて！！もう少し大き

くなつてからだ!!」

「ぶー。義兄ちゃんのケチ!!」

そう言つて頬を膨らますこの子を血は繋がってなくともホントの妹として見てきた

亮「約束するから…な？」

「むー……」

亮「よし、じゃあ他のことをしようか」

「やっぱり教えて!!」

亮「…はぁ…仕方ないな…技を教えてやる…一回しかみせないからよく頭に焼き付けろよ!!」

剣に気を溜めるようにし、抜刀から剣圧を幾度とも飛ばす

「凄い!!」

亮「わかったか？剣の扱い方とかはお師匠に聞いたらどうだ？」

「うん」

あれからすごく長い年月が過ぎた

亮「どうした？」

「買い物よりお祖父様とお義兄さんの稽古のほうがいいです……」

亮「今日はもう無いからまた明日になる。それなら買い物というより散歩に来たんだが……不服か？」

「そんなことないよ！」

亮「もう少しおつきくなったら剣の相手してやるからな」

「うん！」

亮「よし。なら今日は好きなもの買ってやる。お望みの物と言って

くれ」

「ホントですか！？では……」

それから買い物は続いた。

亮「ちょ……ちょー！！ホントに勘弁してくれ！！俺の懐が！！」

「何でも買ってやるって言ったのお義兄さんですよ？」

亮「そ、それでも勘弁してくれ……」

「はあ……わかったよ！ならこれでおしまい！」

亮「な！？」

その「おしまい」は俺の所持金の事を言っていたのかもしれない
それで家に帰ってきた

「ただ今帰りました！！」

とあの子は走っていく…俺はその場に倒れ込む…するとある部屋から誰かが出てきた

「お疲れさま」

亮「あう…お嬢様？」

「今度は私の相手してね？」

亮「あ…あはは…」

今日は厄日だったみたいだ…

妖夢が剣を習つてもう数十年の月日がながれた
ある日お師匠悟りを開いた
そこであの子に後を継がせるといふ話を聞いた
あの子は少し驚いた表情を見せた
少したってから悟りは終了したみたいだ
その後お師匠は俺に話しかけてきた

「お主に頼みたい事がある」

亮「え？何でしょうか？」

お師匠が俺に頼み事なんて珍しかったので不思議に思った

「亮太…あの子の側にいてやって手助けしてはくれんか？」

亮「それくらいなら御安いご用です」

「恩に切る…」

お師匠は微笑だったが初めて笑った顔を見せてくれた
その後のお師匠の行方は俺もあの子も知らない

.....

町を歩いていると急に声を掛けられた

亮「誰？」

「今は知るべき時ではないわ。来年の…春の異変気を付けることね。一族が滅びるわよ」

亮「は？信じられるわけ無いだろ！！」

「私は真実を伝えたまで…また会いましょう…」

そう言つて女性は消えた

なんだったんだ？それに一族が滅ぶとは？
まあ悩んでいても仕方ない…後で考えよう

ある日

「義兄さん！！お手合わせ願います！！」

亮「え？手合わせならいつでもしてるじゃないか？」

「それはそうですけど…今回は違います…本気で来てください！！」

そう言つて真剣を抜いてくる

亮「わわ！？ちょ！？本気でか！？」

「本気と書いてマジです！！行きます！！」

飛び上がり斬りかかってきた

俺は腰から剣を取りだし受け止める

亮「危なっ！？」

「ふっ！！」

すかさずあの子は腹に蹴りを入れてきた

亮「ぐっ…あ！？」

蹴りを避けきれず蹴り飛ばされた

あの子は少し笑ってるように見えた

「義兄さん？本気で来てくださって言いましたよね？」

亮「っ…」

「私を…なめないで下さい!!」

亮「ぐっ…なんだよ…」

あの子は瞬時に後ろへ回り込み剣を振ってきた

亮「甘いぜ!!」

ガキィ!!

俺は剣を受け止めた。

あの子の目は本気だ…ならば…

亮「よしよし…わかったよ…なら…楽に死なせてやる」

そう言ってあの子を睨み付ける

「うつ…!!」

あの子は少し後ずさったが…体勢を立て直して睨み付けてきた

亮「いいねいいね！！行くぜえ！！」

「ひゃっ！？」

俺の振りかざした剣を受けとめた事を確認して拳で鳩尾を突く

「か…はっ…！！」

宙に浮いた敵を右回し蹴りで左に吹き飛ばす

「ぐあっ！？」

亮「お寝んねにはまだ早いぜ！！」

「くっ！！行けっ！！」

半霊を飛ばしてくるあの子。

無駄だ…

半霊を押し退けたその時彼女は上空に舞い上がり兜割りをしてきた

亮「我が命を絶つ者の侵略を防げ！！『絶命剣』！！」

刀を上に掲げ盾を創る

「この剣に斬れぬ物など…無い」

「うおおおおお！！」

「そこまで！！」

「！！」

その声に気づき俺とあの子は離れる

亮「お嬢様！？」

「止めて良かったみたいね。貴方達…目が本気だったわよ。特に亮太！！」

亮「はいいい！？」

突然の指名に声が裏返ってしまった

「貴方が一番本気になってどうするの！！貴方…本気でこの子を殺すつもりだったでしょ！？」

亮「……………」

「少し頭を冷やしてきなさい…」

亮「わかりました…」

「義兄さん…」

亮「ごめん…」

俺は何時もの場所に向かった

何時もの場所とは山にある洞穴みたいな所である
その入口付近に座り一息つく

亮「ふう……」

確かに俺が本気になってはいけなかった…

何故あそこまで本気になってしまったのかわからない

あの子と俺では明らかに俺の方が上だった。なのに！！俺は…俺は！！

亮「くそっ！！なんなんだよ……！！」

そして俺は横になっていつの間にか眠ってしまった

亮「む…寝ていたのか……ん？」

亮「……」

「あ…起きた」

あの子が後ろから抱きついていた

亮「はあ…何してるんだ？」

「…義兄さんを探しに来ました…」

亮「まあ…ありがとうとは言っておく」

「探したのですよ？…何時間も…」

亮「そつか…泣いているのか？」

「泣いて…ないです…」

亮「声が上擦っているよ」

「うつ…ぐすつ…見つかって良かったです…何かあの後ろ姿を
みたら…ぐすつ…何処かへ行ってしまうんじゃないかって…」

あの子の手を離し、 向き合う

亮「…俺は…お前の傍からいなくはない…この御守りをお前に

渡す…あと…」

あの子の頭を撫でながら俺は

亮「探してくれて…ありがとな…俺の大好きな妹……さあ帰るぞ…」

「うん！」

亮「…背負ってやろうか？」

「子ども扱いしないで……！！！！／／／／」

亮「俺からみたらまだまだ子どもだ……」

「いつか見返します！！剣の腕も！！女としても！！」

亮「女は関係無いだろ……！！」

帰ってきてあの子と別れてから俺は屋根に登って寝そべっていた

亮「……………明日は…」

「そうよ。春の異変よ」

亮「アンタ何処から!」

「そんなことはどうでもいいでしょ…」

数日前にあった金色の髪をもった女性が横に座っていた

亮「どうでもいいって……………はあ」

それから沈黙が続いた
だが破ったのは俺だった

亮「あのさ」

「?何かしら?」

亮「その滅亡を止めることは出来ないのか?」

「はつきり言うけど…貴方ごときの力ではムリよ」

亮「そっか……」

「余り悲しんで無いようね」

亮「まあ…薄々気づいていたのかもしれない…避けられないって」

「ロマンチストでもないみたいね」

亮「明日の異変を俺が食い止めるってか？無理だな。だけどな…あの2人は守りたいんだ…」

「……………まあ精々頑張ってね」

「そこに誰か居るのかしら？」

下からお嬢様の声が聞こえてきた…
横を見るとすでに女性は居なくなっていた

亮「ああ。亮太です」

「亮太なの？」

亮「上がります？」

「うん」

お嬢様の手を引き屋根の上に持ち上げる

「ありがとう」

亮「いいえいいえ」

「…頭は冷えたかしら？」

亮「おかげさまで」「そう」

亮「……」

「……………」

また沈黙か！！

亮「明日は…大丈夫ですよ…」

「大丈夫よ。心配しているの？」

亮「ええ。まあ」

「でもいざとなったら亮太は……………」

亮「どうしました？」

彼女の顔がだんだんと暗くなっていく

「……………何でもないよ。気にしないで……………」

亮「そうですか……………」

「私はそろそろ寝るわ。おやすみなさい」

亮「ああ…おやすみなさい」

そして春の異変…運命の日がやって来た…

亮「お嬢様？」

一族が集まっていた部屋の前でガタガタ震えていた…

「亮…太…？」

亮「お嬢様！！」

「いやあああああ！！」

お嬢様は走りだした…

中を覗いてみると一族の皆が亡くなっていた

亮「うつ…」

俺は嘔吐感を我慢し中を確認する為剣を取りだし中に入る

亮「そんな…外傷が無い！？ではどうやって…」

「義兄…さん…」

亮「大丈夫か!？」

まだあの子が息をしているという事実には俺は安堵した

「義兄さん…から貰っ…た御守…りの力…かな…」

亮「もう喋るな!!少し此処にいろ!!すぐ来るから…」

部屋を飛び出しお嬢様を探す
走って…走って探す

ある桜の近くまで来た

亮「これが…満開の桜…!!」

その側に立っているお嬢様

亮「お嬢様！！」

「亮太…最後まで迷惑かけたね…」

亮「最後って…何を言っ…！！」

「皆の死は…私のせいなの…」

亮「な！？嘘だ！！なら何で外傷が無かったんだ！！」

「それは私の能力だよ…だからもう誰かを殺してしまわぬように」

首に小刀を当てるお嬢様

亮「止めるおおおおお！！」

走りだす俺…頼む…間に合ってくれ！！

ズシャ

亮「あ…ああ…あああああ！！」

血飛沫をまともにかかった俺は…倒れ行く彼女を受け止めた

「最…後のさ…い…まで…はあ…はあ…な…まえ…いつ…
て…」

彼女はそのまま動かなくなった
俺を責めるかのように雨が降っている

亮「まさか…アイツの言った通りになるなんて…」

「だから言っただでしょう？」

あの時にあった女性が目の前に現れた

「彼女の魂は私が預かるわ…望みなら一緒について来てもいいわ」

亮「意味わかんねえぞ！！大体どこに連れていくきだ！？亡霊としてそこで暮らさせるのか！？」

「彼女の行くところは言えないわ……その通り……彼女を亡霊としてそこで暮らさせる。この屋敷と共に」

亮「っ！！なら……あの子も連れていってくれないか？彼女だけなら心細いだろうから」

「わかったわ。ならその子を連れてきてもらえる？」

亮「わかった」

あの子の元へと駆けていった俺に

「いい友を持ったのね……羨ましいわ……」

後ろで言っていた言葉に気づいてはいなかった

亮「おい……しっかりしろ……」

「義兄…さん…？もう…わ…たし…は…駄目…です…」

亮「そんなこと言っな！！！！！」

あの子を抱き上げ全速力で走る

「義兄さん……ありがとう……」

……

亮「なあ！！この子は助かるのか！？助けられるのか！？」

「大丈夫…任せて……それで、貴方はどうするの？」

亮「正直ついて行きたいが……やることもあるしな…だから俺はいい…お嬢様の分まで生きないと…未来を知っていてどうにも出来なかった俺への罪だから……あとその子にこの剣を渡してくれ」

「わかったわ。ではサヨナラ。亮太…お元気で」

亮「2人を頼んだ」

女性はまたその場から姿を消した

もうお嬢様が苦しまないよう満開の桜の下に亡骸を埋めた

さあこれからどうしようかね…
って決まってるな…

アイツの分まで生きなければ

亮「取り合えず町を出たけど…多分俺は死んだことになるはずだ」

森の中を歩いて何時もの場所に向かった

亮「身を隠せるかもな…」

亮「なんだ…何時もの洞窟だよな…」

それから死なない程度に食料をとりなんとか行き長らえていた

亮「もう昔の面影は無くなったな…そして俺は忘れ去られ幻想になった…か…あいつらどうなるのかな？大丈夫かな？」

何故か涙が出てきた…あの楽しかった日々には戻れない…それだけでも辛い

だから涙が出るのだろう…確かに生きるのが俺の償い…こんなにも辛いものだったなんて

もう寝よう…

泣き疲れた

その頃町ではある少女が人を探していた

「すみません！！私と同じような格好をしている方を探しているのですか！！」

だが彼女の姿はあまりにも他の人達と違うかった

「写真とか持っていないの？」

「じゃ…じゃしん…ですか？」

彼女の時代に写真なんてモノはない

「…わかりません」

「話しにならないな」

といって男性は去った

周りからは見たこともない服装の彼女は異端者として見られていた

「もうお祖父様もいないのかな……行方不明っていうのは本当だったんだ……義兄さん……やっぱり離れてしまいましたね………うっ…逢いたい…逢いたいよお……うわあああああん!」

雨の中独りぼっちの少女が泣いていた

第一章

目を覚ますと知らない場所に横たわっていた

亮「????…なんだなんだ?どこだここ?」

辺りは木が生い茂っていた

目の前には階段があった。他に行くところも無いので階段を上がる

亮「こんにちわ」

階段を上がり終えた俺はだれか居ないのか呼び掛けてみた

霊「ん?誰?...参拝客?なわけ無いわよね」

亮「無視しないでくれますか?」

霊「ごめんなさい。何かしら?」

亮「色々聞きたいけど…ここは何処ですか？」

霊「私の神社…忘れられてるのかしら…まあいいわ此処は博麗神社よ」

博麗神社？

聞いたことないぞ！！

はたして此処は何処なんだ…！！

亮「博麗神社…」

霊「そうよ。まさか…知らないの？」

亮「すみません。聞き覚えが無いもので」

霊「はあ…いつか忘れ去られるのかしら…この神社…」

亮「あ…えっと…所でこの辺りは何という地域なのですか？」

霊「地域？いやいや。ここは幻想郷よ。もしかして幻想郷のことも知らないの？」

亮「幻想郷？」

聞いたことない…住んでいた所と同じようで何処かが違う
幻想郷に博麗神社…

霊「可哀想に…迷い込んで来てしまったのね。帰してあげたいけど
も…ちよつと色々あったからもう少し後でもいいかしら？」

亮「仕方ないですね……此方から頼んでる身でもあるので」

霊「あ…その代わりにここで居候してもいいわよ」

亮「ホントですか！？」

縁側に招かれてお茶を出してもらい幻想郷のこと最近の異変について話してもらった

亮「取り合えず此処の事は大体分かりました。でも紅魔館という所が気になります」

霊「紅魔館？ただの人間が生きて帰れる所じゃ無いわよ？」

亮「でも…幻想郷に住む限り友好的にならなければ…」

霊「ふーん…まあ私の招待なら大丈夫でしょ」

亮「ありがとうございます」

霊「武器は護身用に持って行ったら？神社の倉庫に剣があった筈…
ちよつと待ってて」

亮「あ…俺も行きますよ」

霊「いいわよ。待ってて」

と言つて倉庫の方に歩いていった
その後境内の方から誰かがやって来た

？「霊夢のところにお客さん？参拝客？珍しいわね」

女の子が横にいる女性に話しかけていた

？「確かにそうですね」

女性は日傘を女の子にさして言葉を送っていた

亮「こんにちは」

？「貴方何物？返答しだいでは」

女の子が尋ねてくる

という脅しに近いな

何か何処から出したかわからない槍を出している

居候なんて言ったら殺られそうだな

亮「い、いやいや！別に俺は怪しい者じゃない！ただの参拝客だ！
！」

？「果たしてどうなのかしらね」

そこに霊夢さんがやって来た

霊「あら？レミリアに咲夜じゃない」

レ「また来たわ霊夢。それよりコイツは誰なの？」

レミリアという女の子が俺を指差してきた

亮「だからただの「居候よ」なあ！？」

言いやがったよこの人！！

ああ…顔が怖ええ

レ「ああそうなの」

亮「ちょ…ちょちょ…は、早く武器を貸してください！！」

レミリアの方を見ながら霊夢の方に手を伸ばす

霊「ちょっと！！どこ触って！！」

今の行動で油に火を注いだようだ

レ「貴様あああ！！」

亮「うわあああ！！」

目の前に先程の剣を突きだし槍を防ぐ

亮「くっ！！調子に乗るな！！ってあれ！？剣が抜けない！？」

霊「あ、言い忘れてたけど…ずっと前から抜けないのよ」

亮「それを早く言ってー！！」

レ「ほらほら行くわよー！！」

亮「仕方ない…帯刀術だ！！」

レミリアに向かって走るがレミリアの方が一足早かった

レ「こっちよー！！」

後ろに回り込まれたがすかさず振り向き防御する

亮「素手？いや…爪か！？」

レ「も1つ！」

横に腕を振ってくる

皮膚を切り裂かれ左腕から血が出てくる

亮「何なんだよ……人間じゃねえのか？此処はどうなってんだよ」

霊「よそ見しちゃ駄目！！」

亮「くっそおおおお！！」

一か八かで剣を抜こうとした
すると

鞘から刃が抜けた

亮「よっしやあああ！！」

やった！！抜刀できた！

だが刃がぼろぼろみたいだな

レ「抜けたところで何ができるのかしら！！！？」

亮「できるさ！！」

地面に剣を突き刺し土をほりあげる
かなりぼろぼろなのかミシミシ音をたてる

レ「そんなもの！！」

レミリアが突っ込んでくるが飛ばした土を土を操る程度の能力で集め壁にすると案の定激突してきた

レ「ぐっ！！」

後ろに回り込みレミリアの腕を持って関節を極めて地面に押し潰す

レ「あっ！！痛っ！！？」

亮「終わったな」

レ「何故殺さない！？命を狙ってきた相手の！！」

亮「命なんて取らない…取っても何になる…もう誰も死んでほしくない…例えそれが赤の他人でも」

レ「……泣いているのかしら？」

亮「いや…別に……そろそろ離すぞ…お前の連れがお怒りだ」

そつと手を離して体を持ち上げ立たせる
その様子を見た連れの人は構えていたナイフをしまったがまだ警戒をといていないみたいだ

レ「貴方…何者なの？」

亮「それはお互い様だ」

レ「わ、私の事を知らないの？」

亮「ああ。今さっき此処の世界に来たばかりだからな。詳しい事は

知らない」

レ「ならお互いに自己紹介から…私はレミリア・スカーレット。知つての通り紅魔館の主よ」

亮「ふーん…お前が紅魔館の主か…まだ幼いな」

レ「なっ！？幼いですって！？」

亮「ああ。幼い」

レ「何よ！！…アンタだって！！アンタだって…」

怒ってるレミリアを無視して話を進める

亮「あーはいはい。じゃあ俺の自己紹介だ。俺は亮太だ。半人半霊という種族だ」

レ「何よ！！無視するな！！」

亮「さあ自己紹介は終わってたぜメイドさん？」

？「はあ…仕方ないわね。お嬢様もお喜びのようですし」

遠くで「咲夜！？そんなわけないでしょー！！」という声が聞こえるが無視である

咲「私は十六夜咲夜よ。紅魔館のメイド長を務めているわ」

亮「そうなのか。ちょっと教えてほしいんだが…さっきのナイフを数本くれないか？」

咲「…気づいていたの？あのナイフ…まあいいけど…はい」

先程のレミリアとの戦闘中に周りに仕掛けていた投げナイフのことだ

亮「ありがとう」

レ「だから無視するな！！咲夜もよー！！」

咲「すみませんお嬢様」

レ「まったく…亮太！！少し話してもしましょ」

亮「あ、ああ…さつきとは大違いだな…」

咲「ふふ…それがお嬢様よ」

霊「ああ！！ちょっとレミリア！！勝手にお茶を飲むな！！」

レ「別にいいじゃない！！」

霊「良くないわよ！！ほら！！アンタの…湯飲みよ！！」

ゴチンツツという音がした時レミリアが此方に走ってきた…泣きながら

十六夜にしがみつき涙目＋上目使いのコンボをくりだした

咲「うつ…お嬢様！！」

十六夜は鼻血を吹き出し倒れていこうとしたが俺が阻止した

亮「おい！！十六夜！！大丈夫か！！」

レ「咲夜！？咲夜あああ！！」

その後霊夢さんに部屋を借りて十六夜を寝かせた

亮「うわ…内出血してるな…」

レ「うゝ……痛っ！？」

怪我をしたレミリアを治療していた

亮「まったく…派手にやっちゃったな…ねえ霊夢さん？」

霊「な、何のことかしら？それより応急手当もお手のものね」

亮「（話を反らしたな）まあ妹もこうやって何処かにぶついたり転けたりしてたから応急手当ぐらいはできるさ」

レ「また幼いつて！？」

亮「言っていないだろ」

レ「頭を撫でるな!!」

取り敢えずレミリアと話をしたかったのだがやはり十六夜が心配になったので此方に来た

亮「起きてたのか」

咲「ええ」

亮「そうか」

咲「ええ」

亮& a m p ;咲「……………（止まった…）」

亮「紅魔館はまだ他に人は居るのか？」

咲「人っていうのはおかしいわね」

亮「まさか、人間はいないのか」

咲「その通りよ。魔法使いに悪魔がいるわね。あと…」

亮「あと？」

咲「お嬢様の妹がいるわ」

亮「アイツの妹か…なかなか面白いかな」

咲「だけど会わない方がいいわね」

亮「何故だ？」

咲「少し乱暴者なのよ。レミリアお嬢様よりね」

亮「ほう…なら気を付けるよ。あと遊びに行っても大丈夫かな？」

咲「私は大丈夫よ。何時でも貴方を迎えるわ。あとはレミリアお嬢様の許可ね…」

その時襖を開けてレミリアが入ってきた
霊夢さんと誰かを連れて

レ「私も歓迎するわ!!」

亮「そうか。ありがとう。というか横にいる人は誰だ?」

?「アンタが亮太か」

亮「ああ確かに亮太だが…霧雨魔理沙か?」

魔「ご名答だぜ!!私が紅魔異変の解決者の霧雨魔理沙だ…いだっ
!?!何すんだよ霊夢!!」

亮「霊夢さんも異変の解決したんじゃ…」

霊「そうよ。まったく魔理沙ときたら…さも1人で解決したかのよ
うに言うんだから」

魔「えへへ…まあいいじゃねえか」

亮「まあ取り敢えず今から俺はレミリアの屋敷に行こうと思うのだが…主不在だと心細いから2人とも一緒に行かないか？」

レミリアと十六夜に提案してみる

レ「大丈夫よ」

咲「お嬢様が大丈夫なら私もいいわよ」

亮「ありがたい。ではさっそく行くか」

レ「そうね。また来るわね霊夢」

霊「まあ手土産があるなら歓迎するわ」

魔「私も一緒に行くぜ。借りたい物があるからな」

亮「借りたい物？」

魔「そうだぜ。一生借りるだけなんだぜ」

亮「それは借りるとは言わないだろ……」

咲「ちゃんと返してあげなさいよ？パチュリー様も悲しんでいるから」

魔理沙は「何時かは返すつもりだぜ」と言って先に行ってしまった
小言を聞きたくなかったのだろう

亮「空を飛ぶのか……いや……常識には囚われない……か」

レ「何をぶつぶつ言っているの？」

亮「いやなんでもない……じゃあ行くのか。霊夢さん夜には帰ってきますね」

霊「分かったわ。行つてらっしゃい」

紅魔館に着いた俺。

レミリアと咲夜は皆に知らせるからと先にいってしまったので後から来ることになってしまった

亮「ほう…紅魔館ってだけはあるな。第一印象は………紅い!!」

それはそれは真っ赤な館ですこと

門がある。だが門番がいるみたいだ

チャイナ服ってやつかな？異文化はよくわからないな

？「貴方は誰ですか？」

亮「まだ聞いてなかったみたいだな。俺は亮太です。アンタのところのお嬢様が招待してくれたんだが…聞いてないか？」

？「そうなんですか？」

亮「ああ。だから通ってもいいか？」

？「でも…それはちょっと…」

亮「仕方ないな…ここで待たせてもらうよ。えーと…俺は亮太だ。アンタは？」

美「私ですか？私は紅美鈴です」

亮「美鈴か。弾幕よりも格闘の方が優れてるんだよね。聞いた話では」

美「何か格闘だけしかできないみたいな言い方ですよ」

亮「えっ！？いやいや！！そんなつもりじゃなかったんだが…済まない」

美「ふふっ…わかってますよ。案外いい人そうですね」

亮「あ…ありがとうございます」

照れ隠しとしてさっき拾ったレミリアの帽子をくるくると回す

美「その帽子はレミリアお嬢様の物ですよね？」

亮「うん。一緒に来てたんだが皆に知らせるからと先に行った時落としていったんだ」

美「なら大丈夫ですね。通ってください」

亮「大丈夫なのか？」

美「お嬢様の意図が読めましたので」

亮「？そうか」

亮「いやゝ…しかし、本だらけだなここは」

俺は書物がたくさんある部屋に入っていた
レミリア？後で大丈夫でしょ……多分

亮「第1村人（？）はっけーん！！」

？「うるさい…って貴方誰？」

亮「俺は亮太だ。どんな書物読んでるんだ？」

？「魔導書よ」

亮「そうか。名前聞いていいか？」

パチ「パチユリー・ノーレッジよ」

亮「パチユリーか。レミリアの招待で来たんだ。宜しく」

パチ「宜しく。それにしてもレミィが？珍しいわね」

亮「レミィ？」

パチ「レミリアのことよ」

亮「ほうレミィってのがアイツの愛称か……ん……」

魔法使いってのはおんなじ服装だと思ってたんだけど

パチ「な、何？さっきからじっと見てきて……」

亮「いや…魔法使いってのは皆おんなじ服装してるのになって思ってたんだけど違うみたいだな」

パチ「……は？…まあ違うわね。それが何か？」

亮「いいや。ただ単に気になったただけだ。レミリアを待たせるのも悪いから行くな」

パチ「そう。何時でも来なさい。相談くらいならのるわよ。それに「借りてくぜー」……え……」

俺たちの間を魔理沙が全速力で横切った

パチ「待ちなさい！！」

パチュリーが走っていった。

俺は後ろにいるもう一人の人物に話しかけた

亮「後ろにいるやつ…出てきな。何もしやしないって」

こ「盗み聞きするつもりではなかったのですが…すみません」

亮「いや、いいえ」

こ「貴方のことは先ほどのお話でわかりました。私は小悪魔と申します」

亮「小悪魔か…呼びにくいかな…」

こ「？それなら何でもいいですよ」

亮「そうだな……こあ…なんてどうかな？」

こ「わかりました。では宜しくお願いいたします。亮太さん」

亮「ああ。宜しくこあ」

廊下を歩いているとレミリアを見つけたので声をかけた

亮「レミリア」

だが彼女は振り返らずそのまま歩いていく
思わず左肩を掴んで呼び止める
すると振り返りこちらを見てきた

亮「レミリア…じゃない…」

？「貴方は誰？お姉様を知っているの？」

亮「お姉様？もしかしてレミリアの妹か？」

？「そうだけど…貴方は誰？」

亮「俺は亮太ってんだが…」

フ「亮太ね。覚えておくよ！私はフランドール・スカーレット。宜しくね！！」

亮「あ、ああ。宜しく」

あれだなうん…姉より元気だな
道に迷ってたところだフランドールに聞くのもいいな…

亮「なあフランドール。レミリアの居る場所わかるかな？」

フ「わかるよ。ついてきて」

フランドールについていくと1つの大きな扉の前に来ていた

フ「ここがお姉様の部屋よ。お姉様く？入るよく」

ガチャ…ギギイという音をたてて扉が開いていく
そこには着替え中だったのか霞もない姿がそこにあった

レ「ちょ！？開けんな！！閉めて閉めて！！」

亮「よー来たぞレミリア」

レ「アンタも普通に入ってこないで！！」

亮「別にお前の未発達なの見たって俺は…あいたっ！？」

レ「いいから向こうを見ている！！そして未発達で悪かったな！！」

顔を叩かれて後ろを向かされた

フ「ふふっ…何か亮太って面白いね」

唐突にフランドールが言ってくる

亮「そうか？」

フ「うん。これなら弾幕ごっこで遊ばなくても退屈しないかも」

亮「？何か言ったか？」

フ「ううん別に。それにしてもお姉様への態度が普通じゃないね」

亮「普通じゃないか？どんな相手でも対等にいたいからね」

お嬢様以外はな…まったく…元気でやってるのかな…

フ「どうしたの？」

亮「ちょっと昔のこと思い出しちゃって…」

フ「ふーん…よかったら「聞いてあげてもいいわよ！」むー…割り込まないでよお姉様」

レ「さあ、話してみなさい」

亮「ホントに聞くのか？面白くないぞ？暗くなるだけだぜ？」

レ& a m p ; フ「それでも！！」

咲「私も聞きたいわ」

いつの間にか咲夜が来ていた

亮「お前もか！？まあ、いいか…じゃあ話すぞ？」

亮「…っていう事があつたんだよ…ほーらしんみりしちゃったじゃないか」

レ「大変だったのね色々…家族がないのよね？」

亮「まあ、血の繋がってない家族ならいたがな数人だけ」

フ「なら私もその家族に入ろうかな。大丈夫かな？」

亮「別にいいよ」

断る理由はないし家族が増えるのはうれしいからな

フ「ありがとう!」

レ「だけどフランだけじゃないわよ。私達も家族よ…」

亮「お前たち…それは同情か？」

レ「いいえ。自分の意志。同情なんかではないわ。ね？咲夜」

咲「ええ」

パ「そういつことよ」

こ「そういつことですよ」

美「です」

そこにはさっきまでは居なかった筈の三人が来ていた

亮「お前たちまでいたのか！？はあ……」

レ「ってことで私達も貴方の家族の一員ね。家族なんだから遠慮したら駄目よ？」

亮「あ、ああ……ありがとう……」

久しぶりだな……家族の暖かみ……やっぱりあの頃を思い出すじゃねえか
だけど……新しい家族も悪く……無いかもな……

第二章

俺がここにきてからだいぶたつたある第百十九季の五月のことだった
何時もなら春を迎えて雪解けの時期なのにまだ雪が降る始末であつた

亮「霊夢さん…幻想郷の春はこんなにも遅いのですか？」

霊「おかしいわね…何時もこんなじゃないのに…ちよつと行つて
くるわ。お留守番宜しくね」

亮「え？あの、ちよつ」

と狼狽えている間に霊夢さんは飛んで行つてしまつた
お留守番より着いていつてみようかな
そうして俺は霊夢さんの後をつけていった

亮「あつちが湖の方だな…彼処にはチルノとレティ…それに大ぢや
んがいたと思うんだが…」

すると下のほうから

大「亮太さーん！こっちでーす！」

亮「おー大ちゃん。どうした？」

大「チルノちゃんとレティさんがー！」

亮「もしかして…あちゃー…なにやってんの…」

レテ「別にいいでしょ？今年の冬は長いから少しくらい遊んだって」

チ「そうだよ！！まだレティがいてくれるから少しくらい」

亮「あーあーわかったわかった。ったく…それで霊夢さんはどっちに行った？」

チルノの言葉を遮り俺は霊夢さんの行方を聞いた

レテ「向こうの方よ」

亮「わかった。ありがとな」

また霊夢さんを追って俺は飛んだ

亮「なんだなんだ？変な所に迷い込んだじゃった」

人が居る気配がないのに立派な家がある。まさしく変な所である

亮「昔文庫で読んだことがある迷い家みたいだな」

霊夢さんは何しにここへ？

ん？あれは…女の子が落ちていつている

落ちていつてる！？

亮「わわ、わ！！」

地上すれすれで相手をキャッチすることができた
怪我をしていたので応急措置を行った

？「いてて…強かったなああの巫女…あれ？お兄さん誰？」

亮「俺か？俺は亮太」

橙「そう。亮太っていうんだ。私は橙だよ。治療してくれてありがとう。でも早く行かないと此処と向こうの扉が閉じちゃうよ」

亮「扉？」

橙「うん。取り合えず今は巫女についていて」

亮「う、うん。わかった。また会えるよな？」

橙「さあね」

亮「そっか…まあいいや。【またな】橙」

そういつてこの不思議な場所を抜け出した
魔法の森に来ました…霊夢さんを探していると袖を引っ張ってくる
者がいた

亮「ん？誰だ」

上「シャンハイ」

亮「おお…上海かどうしたんだ？」

上「シャンハイ！シャンハイ！！」

とても慌ただしく何かを訴えかけてるようだった

亮「何かあったのか？」

上「！！」

上海はついてこいと言っているかのように見えた
そうして上海についていった
すると少し怪我をしているアリスに出会った

亮「おいアリス。大丈夫か？」

ア「亮太？どうしてここに？」

亮「あの巫女さんを追いかけてるんだ」

ア「あの？なら冥界の方に行くと思うわよ」

亮「冥界？わかった。行ってみるよ」

ア「行つてらっしゃい。あゝあと…その…手当てありがとう」

亮「おう」

上「シャンハイ」

亮「上海もまたな」

魔法の森を抜け冥界を目指した

冥界と此方の結界みたいな所で霊夢さんと合流した

亮「霊夢さん!!」

霊「亮太！？どうしてここに!？」

亮「いや、楽しそうでしたから…つい」

霊「はあ…まあいいわ…さっき騒霊の三姉妹を倒した後だし…後はここを越えて異変の根源へ一直線よ」

亮「そうですね」

霊「それにしても亮太ってなかなかやるのね」

亮「まあ…多少は腕がありますからね」

霊「でもこの妖精に対して近距離だけで戦ってるじゃない」

弾幕というものを俺は出せなかった
だから近距離だけでしか倒せなかったというわけだ

亮「近距離しか無いのですから仕方ないです」

霊「それにしても…凄く厚着してるわね…その服一枚貸してよ。顔も見えてないくらいしてるのに」

亮「えー…霊夢さんも着てくればよかったじゃないですか」

霊「そんなこと言っても貸してくれるのね。ありがとう」

亮「はあ…あ！階段が見えてきましたよ」

霊「そうね。じゃあ亮太…行くわよ！」

亮「はい！」

さあ…根源に会いに行こうじゃねえか！！

亮「だいぶ飛んで来ましたけど…」

霊「つかないわね…」

その時目の前に誰かが現れた

亮「な！？」

霊「亮太！？何してるの！！」

いや、違う…あの子な訳がない…

霊夢さんの声は聞こえず相手を見ていると…

？「貴方もなけなしの春を持っているのですね？それを渡してください！！」

亮「渡すわけにはいかない…力強くで取りに来るのなら…戦ってやる」

霊「ちよっ…ちよつと亮太」

亮「霊夢さん…先に行ってください。俺は確かめなくちゃならない」

妖「私の名前は魂魄妖夢です。貴方の名前は？」

やっぱり、妖夢だったのか…

亮「すまない…まだ名を明かすことはできない…じゃあやろうか」

妖「妖怪が鍛えたこの白楼剣に斬れぬ物などあんまりない！！」

亮「あんまりないってなんだよ!!」

俺は帯刀した剣で構えをとる

霊「なにがなんだか分かんないけど先に行くわね!!」

霊夢さんが妖夢の横を通り抜けようとした時妖夢が霊夢に斬りかかった

亮「おっと。お前の相手は俺だろ?」

妖「くっ…行かせるわけには…」

亮「さあ、行くぜ?」

俺の目的は気絶させること。殺すつもりなど全くない

妖「ふっ!!たあっ!!」

亮「遅い！！…まだまだだなー…」

妖「くっ！！ならば！！」

妖夢は俺から距離をとり断命剣を取り出した

亮「……………」

妖「倒れる！！我の仇なす敵の命を断て！！断命剣！！」

亮「…バ力野郎が！！」

妖夢の剣は俺の体を通り抜けた

妖「あ…あれ？通り抜けた？」

亮「スキあり！！」

妖「きゃっ！？」

亮「つてすると思うか?」

俺は妖夢にデコピンをくらわす

妖「いつっ!?!...なぜ?なぜ私を殺さない!?!」

そろそろ種明かしといきますか

俺は厚着を止めて妖夢に向き直った

亮「久し振りだね...妖夢...」

妖「え...ウソ...何で...?だって...だって義兄さんは...義兄さんは
!!」

亮「死んだとでも言うのかい?」

妖「そ、それもありますけど...何故幻想郷に!?!」

亮「いや...俺も分かんない」

妖「分かんないって...はあ...」

飽きれ顔でため息をついている妖夢

亮「な、何だよ」

妖「何時もの義兄さんで安心しました」

亮「ちよっ！？急に抱きつくなよ！！」

妖「えへへ…また会えて本当に良かったです…本当に…」

亮「妖夢…」

妖「居なくなったら承知しませんからね！！」

亮「わ、わかった」

妖「それとこれ返します」

妖夢が渡してきたのは断命剣だった

亮「やはりお前では扱えないか」

妖「何故義兄さんの剣は斬れなかったのですか？」

亮「それはな…これは使用者の心が分かるんだよ」

妖「心が？」

亮「妖夢が相手を斬ろうと思って妖夢の心には俺が残っていたから斬れない。誰でも好きなもの嫌いなものが心の中に分類されている。俺は好きなものに含まれていたんだな。だから斬れなかったんだ。忘れられてるんじゃないかってひやひやしてたよ」

妖「忘れられてるわけじゃないですか！！バカ義兄さん！！」

亮「な！？何だと！！もう一度言ってみろ！！」

妖「何度でも言うよ！！バカバカバカバカバカ！！太バカ義兄さん！！」

亮「このっ！！」

妖「ぐすっ…えっぐ…ホントに…ぐすっ…何処に…ぐすっ…行つてた…えぐっ…の…心ば…ぐすっ…心配してたのに…えぐっ…もう…二度と…ぐすっ…会えないと…思ってた…」

亮「妖夢…ゴメンな…」

妖「うわあああああー!!」

妖「この先ですー!!」

お嬢様に会うために行っているが感動の再会とはいかないらしい

亮「くそっ!!まさか生前の記憶が無いなんてな!!しかも何が埋まっているか知りたいから西行妖を満開にする気だつて!？」

妖「説明ご苦労様です」

亮「とにかくお嬢様のところに…いた!!お嬢様!!」

幽「？」

咲&a m p;魔「亮太!？」

霊「亮太…近寄っちゃダメよ!!」

亮「俺だよ!!お嬢様!!わからないのか!!」

幽「……誰?私の知り合いは妖夢だけよ?」

亮「なんだよ!!…ウソだろ!!」

妖「義兄さん…」

その時西行妖が妖しく光始めた
暴走を始めたようだった

亮「八分咲だと!?!皆逃げろ!!」

全「!!」

亮「後は俺に任せてくれ!!」

魔「でも一人じゃ無理だぜ!!」

霊「そうよ!!」

咲「死ぬ気なの!？」

亮「五月蠅い!!早く行け!!これが俺の罪滅ぼしなんだよ!!」

腰から断命剣を抜き相手に向かって振りかぶる
前々から忌まわしくて嫌いだったんだよ

亮「その桜ああああ!!」

西行妖からの攻撃に耐えつつ近づいていく

亮「どけ!!邪魔だ!!今だ!!幽々子…今助けるから…うおお
おお!!」

切っ先が西行妖に触れたとき辺り一面に光が放出された
西行妖から放たれた幽々子を抱き止め地上に降りてそこで意識を失
った

目が覚めると知らない所で寝かされていた

亮「どこだ此処…それに夢オチってわけ…でもないか…刀残ってるし」

その時襖が開いて誰かが入ってきた

幽「おはよう」

亮「ああ、お嬢様ですか」

幽「やはり私は貴方の知り合いなのね…」ごめんなさい…」

やっぱり忘れているのか…くっ…

亮「仕方ないです…よ？うわああ!!」

何故かお嬢様は抱きついてきた

亮「な、なななな!?!なにやってるんですか!!」

幽「ふふ。照れてる亮太可愛い」

亮「ちよっ！？幽々子どけ！！というかお前絶対記憶あるだろ！！」

幽々子を引き剥がし目の前に座らした

幽「やっと名前で呼んでくれたわね…」

亮「え…あ…はい」

幽「久し振りね亮太。あと家系とか気にしないでいいから敬語とかしなくていいわよ」

亮「あ…うん。幽々子久し振り。妖夢こっちにきたら？」

そう言うとお襦が開いて妖夢が入ってきた

妖「兄さん！！」

と言いながら抱きついてきた
お前もか…

亮「妖夢…何で助けられなかったんだ？」

妖「楽しそうでしたから」

満面の笑みで言ってきたため溜め息しか出てこなかった

亮「ここもしかして…白玉楼…ですよ？」

妖「そうですね。兄さんの部屋も残しています」

亮「そっか…そっかいやアイツはどこにいるのかな？金髪の長い髪を
もってる女性なんだが…」

幽「もしかして…」

？「私の主のことかな？」

そこには九つの尾をもった女性が現れた

亮「貴女は？それに主って…」

藍「私の名前は八雲藍です。よろしくお願いします。主というのは八雲紫様のことです…紫様がお話があるみたいなので私を使わせたみたいです」

亮「わかった。じゃあ連れていってく…れえええうわあああああ
あ…」

喋っている途中で足下が無くなり落ちていく

幽「落ちたわね」

妖「落ちましたね」

藍「はあ…まったく…」

亮「いだっ！？何なんだよ！！」

紫「ふふ…ごめんなさいね。あと少し振り。無力な半人半霊の子」

亮「八雲…紫…!!」

紫「まさか…こんなところまで来るなんてね」

亮「まあ、成り行きとかでね？」

紫「私に聞かれても」

亮「それより…俺は此方にいていいのか？」

紫は少し考えた後許可を出してくれた

紫「いいわよ。向こうに居るよりこちらの方が楽しいでしょ?」

亮「ああ。というよりここは何処なんだ？」

一回来たこともあるようなそんな雰囲気を出している

紫「そうね…この子をみたら分かるんじゃない?」

亮「え？」

橙「こんにちはお兄さん」

亮「橙か。ということはどついつことだ？」

紫「ここはマヨヒガよ」

亮「え？ええ！？あの迷い家！？何か頂戴！！」

紫「ダメよ」

亮「そんなこと言わずに！！」

紫「仕方ないわね…これあげるわ」

投げてきたのは一本の刀

亮「やった！！ありがとな紫！！」

橙「お兄さん子供みたいですな」

藍「そうだな。紫様も顔も緩んでいる」

紫（弟ができたみたい…）

こうして俺の中ではこの異変は解決した
楽しい日々が進んでいくんだろっとな
そう思うとなんだか嬉しくなってきた

第三章

春雪異変が終わって今は初夏

博麗神社では三日おきに宴会が行われていた
俺は気づいた

亮「鬼がいるのか？」

何となくだがそんな感じがした
宴会場を離れると霧の密度が濃くなった

亮「鬼さーん……ってやっぱり勘違いか？」

？「誰だい？私を呼ぶのは？」

濃い霧が萃まって人の形をしていった

亮「やっと本物に会えたな。はじめまして。 亮太といいます」

萃「私は伊吹萃香だよ。で？用は何？」

亮「手合わせお願いします!!」

萃「余程腕に自信があるみたいだね」

俺は首を横に振りそれを否定する

亮「俺はただ鬼さんの力を見ただけだよ。異変は人任せだ」

萃「くすっ…面白い人間だね…じゃあ行くよー!!」

亮「よっし!!」

戦いは数十分で終わった

二人の最後の攻撃が交わされた

亮「はぁ…はぁ…おあいこか？」

俺はその場に倒れ息を整えようとしていた

倒れている俺の横に余裕寂々な鬼さんが座ってきた

亮「鬼さん余裕寂々だな…」

萃「久し振りに少し本気を出せたよ」

亮「アレで本気じゃないのかい！？さすが…鬼さん」

萃「鬼さんじゃないよ…名前で呼んでいいよ」

亮「萃香でいいか？」

萃「それでいいよ」

亮「さあ、俺は戻るよ。妹が煩いからな。萃香が起こした異変だ。誰かが解決しにくるよ…全てが終わったら歓迎会という名の宴会をしようぜ」

萃「うん。じゃあ終わったらお酒付き合ってもらおうよー!」

亮「わかったわかった。じゃあまた後でな」

萃「また後で」

特に俺は何もしていないが鬼と戦えたのが貴重な体験だったかな
この異変が終わって萃香と話していたが

萃「亮太は妹さんがいたんだよね？」

亮「ああ。魂魄妖夢っていうんだが」

萃「会ったよ」

亮「どうだった？」

萃「亮太程じゃなかったかな」

亮「そっか…」

萃「さあ、付き合ってくれて言うたんだから今日は楽しむよ！
」

亮「はいはい…」

妖夢が強くなったら…いやこんな事言ったら怒られるな

百鬼夜行が終わって今季の秋のことです

亮「え！？二人ともこんな時間から出掛けるのか！？」

時間は深夜を越えるか越えないかの時間だった

幽「ええ。今宵は満月の筈だったんだけど満月が出てないのよ」

妖「異変解決の為に行ってきます」

亮「……さいですか」

おいてけぼりかー

確かに満月が無いものな…まあいいや。目が覚めたからどこか行くかな

あれから数時間経ったのだが

亮「夜明けが来ないんだが…満月とは別に誰かが異変を生んでるのか？」

少し探して見るか

何か嫌な予感もするけど…

亮「異変解決　異変解決」

俺は好奇心に負けてもう一つの異変を探しに行った

霊夢&紫チーム

亮「いたいた！！その異変の発端者め！！覚悟しろ…よ…？」

霊&紫「亮太？」

亮「う…霊夢さんと紫…まさか違っよね！？」

紫「私達を倒しに来たのかしら？」

亮「あいや…そっだといいたいけど言えない雰囲気…」

霊「亮太？邪魔しないでくれるかしら？」

亮「ひい！？いやいや滅相もない！！」

紫「絶対に倒してやる！！ですって」

霊「仕方ないわね」

亮「お二人さん？まさか…」

霊& a m p・紫「覚悟を！！」

亮「嘘だろ…こうなりや腕試しだ！！行きますよ！！二人とも！！」

霊「大丈夫？」

亮「な、何とか…」

紫「案外手こずらせてくれたわね」

亮「早く行ってください。俺も後で行きますから」

何であの二人なんだよ…

魔理沙 & a m p ・ アリス

亮「お。魔理沙とアリスじゃないか」

魔「ん？おお。亮太か。何してんだぜ？」

亮「俺は俺の異変解決だよ」

ア「異変？」

亮「ああ…夜明けが来ないから誰かが時間を止めてるんじゃないかって」

魔「なあアリス」

ア「何よ？」

魔「それって私達のことだよな」

ア「そうね」

亮「何してるんだ？」

魔「なあ亮太」

亮「何だよ？」

魔「異変解決は楽しいか？」

亮「まあ、それなりに」

魔「じゃあ異変解決がたまに恐ろしいことになるっていうことを……教

えてやるぜ!!」

亮「ちょ!?!何すんだよ!!!まさか二人とも…」

魔「その通りだぜ!!!邪魔すんなよ!!!」

ア「ごめんなさい。亮太」

亮「じゃあ俺は異変解決するまで!!!」

亮「いっつ…手加減つても知らねえのか!!!」

魔「私の辞書には無いんだぜ」

亮「もうトラウマになるかも知れないな」

魔「はっはっは!!!また何時でも相手になるぜ!!!」

亮「もうしねえよ!!」

ア「はぁ…」

レミリア& a m p ;咲夜

亮「明らかに怪しい人物発見!!」

レ「何よいきなり」

咲「あれは亮太じゃないですか？」

レ「本当？」

亮「おいつす二人とも!!」

レ「ご挨拶ね。怪しい人物呼ばわりなんて」

亮「だってこの異変は絶対にアンタ達のせいだろ!!」

レ「違うわよ!!それにそんなことしたって此方には何の利益もないのよ!?!」

亮「知るか！！若さゆえの過ちつか！！」

レ「何が若さゆえの過ちよ！！」

亮「煩い！！早く夜明けさせろ！！」

咲「夜明け？」

亮「夜明けが来ないんだよ！！だから可能性がある二人に近寄ったんだ！！」

レ「……………」

咲「お嬢様…多分亮太は……お嬢様？」

レ「毎回毎回ガキ扱いしやがって……だったら異変なんて関係無い！！私はアンタにハッキリと決着をつける！！ガキじゃ無いってこと証明してやる！！」

咲「お嬢様……………」

亮「ああ。そうですか！…なら黙らせてやるよ！…ガキンちょ！…」

亮「いって…やっぱり強いな」

レ「ようやくわかったか…私の強さが…」

亮「咲夜って」

レ「なんだと！！亮太！！」

亮「いやーホント」

レ「負け惜しみするな！！おい待て！！」

咲「行ってしまいましたね」

レ「ムカつく！！」

幽々子 & a m p ; 妖夢

亮「お。夜更かし二人はっけーん!!」

幽「あら」

妖「義兄さん!?!どうしてここに!?!」

亮「え?異変解決...だけど」

幽「あら?それなら心配いらないわよ」

亮「でも夜明けが来ないから...誰かが時間止めてるんじゃないかって...」

妖「幽々子様...」

幽「ええ。私達のことね...」

亮「なあ二人とも...!!何すんだ!?!」

幽「ゴメンね亮太。邪魔される訳にはいかないのよ」

亮「やっぱりアンタ達だったのか…」

妖「行きます!!」

亮「くっ…なんだかやりにくいな。仕方ない。これは俺の仕事なんだ!! さっさとやられるよ!!」

亮「うわっ!?!…二人がかりなんて勝てるわけないだろ!!」

妖「負け惜しみですよ」

亮「むう…早く行ってくれ」

幽「なら遠慮なく」

妖「ごめんなさい義兄さん」

亮「強くなつたな…」

妖「？」

亮「何でもねえよ…早く行け」
いろいろな事があつた

色んな異変にも俺は首を突っ込んだ

その代わり分かったこと気づいたことがあり出逢いがあつた

常識に囚われない世界

そして皆がいる世界

大切なモノがある世界

だれ1人欠けてはならない種族は違えども俺達はこの世界の住民な
んだから

俺達は家族だから

俺はこの世界が大好きです

だから守る。みんなの笑顔の為に

だからどんな異変が起ころうとも俺は動じない

さあかかってこい…どんな火の粉も振り払ってやる!!

第四章（前書き）

妖夢視点です

第四章

こんにちは。

白玉楼の庭師兼幽々子様の剣術指南役の魂魄妖夢です!!
文字にすると結構長いですね。

今日は外の世界で言うバレンタインだそうです。

私も仕事が一段落したらチョコを作ろうと思います。

紫様が言い出したこの企画：好きな人に渡したり友達と交換したり
するんですね

なら、私もある人と幽々子様に渡してみようと思います。

ある人については秘密です。

そして私は今義兄さんと一緒に庭の掃除やっています。
私は

「他のことしないでいいのですか？」

と聞きました。

何故なら、バレンタインでの男性はスゴく浮かれていると聞いたので。

すると義兄さんは

「お前らの傍にいるほうが忙しい」

と言った。

ちよつとむつとした…

だから私は

「そうですか!!」

とちよつと怒り気味に言った。

すると義兄さんは少し狼狽えて

「ご、ゴメン！ウソウソ！！嘘だって！！ホントはお前らと一緒にいるのが好きなだけだ」

と言ってくれた。

いつかお前らじゃなくてお前に変わってほしいな…

そして私は

「ありがとっ…義兄さん…」

それから掃除を再開した

掃除が一段落してチヨコを作る為に台所に行こうとすると義兄さんはまだ付いて来るので一旦縁側に居るように言いました…まだ心臓がドキドキしてます…

今は台所で義兄さんと幽々子様に出すお茶と御菓子を用意しています
チヨコはその後ですね

縁側に着くと義兄さんの姿は無く幽々子様だけが座っていました
私は幽々子様に

妖「義兄さんはどうしたのですか？」

と聞いた

すると幽々子様は

幽「亮太ならお客さんが来たから会いに行ってるわよ」

と言った

私はため息を吐き幽々子様の横に御菓子とお茶の乗ったお盆を置いた

幽「心配？」

妖「……はい」

幽「大丈夫よ」

妖「……はい」

何を根拠にそんな事を言うのだろうか

確かに心配だ…義兄さんが他の女性と一緒に…：考えたくもない私はこの人達より可愛くもないし、キレイでもない。

ましてやこの真っ直ぐ過ぎる性格だから…

あーもう！！考えたら考えるだけ胸が苦しくなる！！

さっさとチョコを作る！

また台所に行こうとすると幽々子様が一緒に付いてきた

幽「私もチョコを作るのよ。私は友チョコと言うヤツね」

と言ってきた。

幽々子様は義兄さんの事をどう思っているんだろう…

取りあえず幽々子様と一緒に作っています。

私はいまだに形に迷っています

幽々子様は

「あの子なら何でも大丈夫だと思うわよ」

と言っていた

でも何だか足りない気がする…

こんな形で皆に勝てるのか？

いやいやいや！！何で勝負なんかしてるんだ私は！！

その時幽々子様がこんな事を言ってきた

その瞬間顔が熱くなるのがわかった

「そ、そんな…そんなこと出来ませんよ！！」

「あら？満更でもないんじゃないかしら？皆に勝つならそれくらいしないと」

「そうですね…」

なら少し頑張ってみようかな
取りあえずチヨコ作ろう

時間は夜になっている

義兄さんと呼んで桜の下にいる

この桜の木は季節に関係なく咲いている桜である

因みに今の季節は秋です。私はアキザクラと呼んでいます

「綺麗な桜だな」

義兄さんが来たみたいだ

私は今の言葉に相づちを打った

「話してなんだ？」

無邪気な笑顔でコチラをみてくる義兄さんを見て少しやりにくくなりました

でも負けたらダメ魂魄妖夢！！言えるのは今しか無いの！！

「義兄さん…チヨコ渡しますから…後ろ向いてください！！」

「わっ！？何だよ…急に大声出すなよ」

と言いながら後ろを向いた義兄さん

それと同時に口の中に小さなチョコを含み少し溶かし

「義兄さん…こっちに向いてください…」

「もういいのか？どんなチョコなん…んむっ！？…」

少し背伸びしながら義兄さんにキスをして口移しをした
ほんの数秒がとても…とても長い時間を感じた

唇を離し義兄さんに向き直る

義兄さんの顔は真っ赤だった…私なのですがそれ以上に真っ赤だと思っています

「お、おま、お前…」

「ご…ゴメンな…ん！？」

逆に仕返しを受けたみたいだ

「義兄さん…私は…私は…！」

「待った…！」

義兄さんに止められた…やっぱり他に好きな人がいるのかな…悔しいなあ…

「俺から言わせろ」

「え？」

「俺は…お前が…好きだ…先に言わしたくなかったんだよ」

「え？それじゃあ…」

心の中のつつかえが無くなったようだった…
義兄さんは…私の事を！？

「あと、これからは名前で呼べ。わかったな」

「うん！亮太！！」

良かった…ホントに良かったよ…
嬉し涙が止まらなかった…両思いってことに嬉し涙が出てきた

「わわっ！？泣くなって！！」

「うるさい！！泣かせてください！！」

これが忘れもしないバレンタインだった

第四、五章

こんにちは。どうもです。

俺は白玉楼に住む半人半霊の亮太と言います。

今日は外の世界で言うバレンタインらしいですね。

聞いた話では好きな人に渡したり友達と交換するんですよね？

紫からはそう聞きました

今は妖夢の傍で話をしています。

邪魔はしてないですよ

ただ少し妖夢がおかしかったような気がしたんで付いてきただけです

急に妖夢が話しかけてきました

「他のことしなくてもいいのですか？」

たぶん妖夢はバレンタインには男共は浮かれていますっていう気持ちがあるんだろう

だから俺は意地悪気味に

「お前らというほうが忙しい」

と言った。

言い方が悪かったみたいだ。

妖夢が怒り気味に言ってきた

「そうですか!!」

って言われた。

むう…そこまで怒るとは…予想外だった
なだめるように俺は

「ご、ゴメン！ウソウソ！！嘘だって！！ホントはお前らと一緒に
いるのが好きなだけだ」

と言った。

少し満足気な妖夢であった。

ホントは「お前と一緒にいるのが好きなだけだ!!」って言いたか
ったんだがな…俺って小心者なんだな

庭の掃除が終わった妖夢は台所に向かって行った

俺は縁側に居るように言われたので今は幽々子と一緒にいます。

「今日は晴れてるわね」

「確かにね。昨日まで雨続きだったからな」

「暖かくなったら眠たくなるわね」

「そうだな」

なんて他愛のない会話をしていたらカメラのシャッター音が聞こえてきた

「やっぱりあなた方2人は絵になりますね」

「なんだ…文じゃねえか…」

「はい。少し話ませんか？」

「いいぜ」

取りあえず階段付近まで文と歩いていた

「いやー…別に話すことなんてそんなに無いんですけどね」

何を言い出すんだコイツは…

「だったら何で？というか何時もの喋り方してくれ」

「そう？チヨコ私に來ただけよ。はい」

キレイにラッピングしたチヨコを渡してくれた

「早く付き合いなさいよね。妖夢と」

「うるせー。用が済んだらとっとと帰れー」

「はいはい。その時は新聞一面に載せますからねー！」

記者魂が最後に出ていたな…

戻ろうとすると珍しい客が來た

「久しぶりに会いに來たわー！！」

「どうもお久しぶりです」

「また珍しい客が来たもんだ。久しぶりだな。天子に衣玖」

そうあの二人組だ

天子が地震起こしたおかげで偶々博麗神社にいた俺が死にかけたんだよな

「俺がマジで死にかけた時以来だな」

俺が嫌味たらしに言っていると天子は

「う…アレは素直に謝ったじゃない…」

「ふふ…アレは正直以外でしたね」

「まあ正直に謝ったからアレぐらいで済んだんだから感謝しろよ？」

「何する気だったの!？」

久しぶりにあったものだから会話ははずみ満足したころ

「コレ渡すわ」

「チョコか？」

やっぱりチョコしかないよな…

「亮太が大好きな【アノ】桃も使ってますよ」

「そ、そうか…」

アレそんなに美味しく無いんだよね。衣玖は分かってて入れてるっぽいけど

「そろそろ帰るわ。また来るわね」

「ああ」

そう言って帰って行った。そろそろ戻ろうか。
戻っていると後ろに気配を感じ振り返ろうとしたとき何者かに抱き

つかれた

「っ！ー！やーめーろ！ー！離せにとりー！ー！」

「なーんだ…バレてたのか」

そこには光学迷彩を着ていて頭だけしか見えてない河城にとりがいた

「全部脱いでくれ…生首は心臓に悪い」

「ゴメンゴメン。これで大丈夫でしょ？」

何時もの服を着たにとりが立っている

「チヨコ渡しに来たんだけど…1つお願いがあるんだ」

「なんだよ？」

にとりが言ってきたのは外の世界のモノを見たいから紫に言ったら
しいのだが保護者兼付き人が要るらしいので俺に言いに来たらしい

「大丈夫かな？」

「まあ…別に大丈夫だ。俺も興味があるしな」

早苗だけの情報だとまだ足りない気がするから調べたいことはたくさんある

「よっし…！決まり…！はいチョコ…じゃあね…！楽しみにしてるよ…！！」

にとりは俺にチョコを渡して風のように去っていった
誰も居なくなった…昼に差し掛かってきたので昼飯を食いに戻ろうとした

「遅かったわね」

「ん？ああ…久しぶりにあったら会話ははずむからな」

「はいチョコ」

幽々子からチョコを貰った…仕方ない…貰ったチョコ全部食べるか

「うつ…幽々子のだけ旨い…衣玖…何の恨みがあるんだ。あれほど桃はいらんと言ったのに…にとりはにとりで何かパーツみたいなのが出てるし…」

「災難ね…」

この調子で何人が来たのだが印象があるチヨコだけ教えよう

「フランのチヨコなんだが…何か血生臭いんだよな……血肉とか…まさか…はは…は…」

「チルノはチルノで冷やしすぎて凍ってるし…確かに冷えてるチヨコは好きだが…」

「ナズは…チーズだよな…だがそのご主人は……かつら!!げほっ!!げほっ!!辛すぎるだろ!?!…何を間違えて唐辛子を入れたんだ?ありえんだろ」

「ぬえとかてゐとかは明らかに下心ありありの唐辛子っぷりだな。もうどつかのドジっ虎のおかげでもう麻痺してるから辛くな…あ、駄目だ辛い!!死ぬ!!死んじゃう!!」

「クスッ…大丈夫？」

悶えている俺の横でクスクス笑いながら楽しんでいる幽々子

「ぶはゝ…まだピリピリしてるよ……またチョコが増えてるよ。口直しに食べよ…」

それからチョコを食べ終わったのが夕飯前だ。

「義兄さん？ご飯ですよ」

「いやゝ…今はいいや…」

「何故ですか？」

「チョコの食い過ぎ」

「……………そうですか。では暫くしてからあの場所に来てください」

「…分かった」

あの場所とは季節外れの桜のことだ
妖夢の見つけた桜はアキザクラと名付けられた

暫くして妖夢のもとに行った

「綺麗な桜だな」

と言うと妖夢は

「そうですね」

と相づちを打ってきた。

妖夢の顔が心なしに暗かったような気がした

「話ってなんだ？」

だから少し元気付けるように明るく言った
すると余計に暗くなったような気がした
だがその後もじもじしていた
今日の妖夢の様子がおかしすぎる

「義兄さん…チヨコ渡しますから…後ろ向いてください!!」

「わっ!? 何だよ…急に大声出すなよ」

後ろを向かされた俺は少し不機嫌になった
少し時間が経ってから妖夢が

「義兄さん…こっちに向いてください…」

と言ってきたので振り向こうとした

「もういいのか? どんなチヨコなん…んむっ!?!?…」

最初は何か分からなかった…

時間が経ってやっと気づいた

キスされたんだと…しかもチヨコは口移しで渡してきた

今までのチヨコよりも幾分も甘い気がした

息が続かなくなったのか妖夢が離れていった

顔を真っ赤にして出ている舌からは銀色の糸が俺の舌と繋がっていた

満足そうな顔をしている妖夢に少しむっとしたのでやり返すことに
した

「う…ゴメンな…ん!？」

今度はさっきよりも早く離れた
すると妖夢は

「義兄さん…私は…私は!!」

これは駄目だ!!先に言わす訳には!!

「待った!!」

俺は静止をかけた。妖夢はやっぱり…みたいな顔をしていた。

「俺から言わせろ」

この一言で妖夢の顔が変わり驚いた表情を見せた後悲しそうな表情
を見せた。

「え？」

妖夢から言ってくれようとしたんだ…だけど…俺が許さない

「俺は…お前が…好きだ…先に言わしたくなかったんだよ」

「え？それじゃあ…」

「あと、これからは名前で呼べ。わかったな」

「うん！亮太！！」

あら？少しは躊躇するかと思ったのだが
思っていたら妖夢が泣き出した

「わわっ！？泣くなって！！」

「うるさい！！泣かしてください！！」

と言って叩いてきた

忘れられないバレンタインだった
というのは妖夢だけだと思う
これからが大変だったんだ

カシャカシャ

という音が聞こえて振り返ると

「ちょっと文！？バレてるわよ！？」

「あやややや……仕方ないですね。散！！」

はたてと文が居たが去っていった……
さっきの音聞いたことが……まさか

「写真撮られたああああ！？」

妖夢も泣きつかれて寝ちゃってるし……今日の夜は長くなりそうだな……

「待てゴラアアアアアア！！！！！！」

「「来ちゃったあああ！？」」

結果は分かりきってはいたが……少しでも抵抗したかった

「うわわ！？」

でも落ちていく中…思ったんだ…

「結局バレるんじゃない…？」

ってさ…そして俺の意識は途切れた

第五章

ある日、俺は何時ものように朝起きて朝食を食べ妖夢の手伝いをし
て休憩に幽々子と話していると

文「あやや…今日はイチャイチャしてないんですね」

は「もう止めなさいよ文…」

文「なに言ってるんですか！…これから毎日のように弄られんです
から！！」

亮「うるせえ…バカヤロウ」

幽「ふふ」

そこにお茶を持ってきた妖夢
俺はお盆を受け取るうとした時それは起こった

ズシャア

亮「え？」

割れたお盆が宙に舞った
それと同時に俺の手首が飛んでいた

亮「ぐああああー!!」

幽「な、何をしているの妖夢!？」

妖「ア…アヒヤ…アヒヤヒヤー!!」

文「ま、まずいですよー!!本格的にまずいですよー!!」

は「それより亮太をー!!」

亮「うぐ…ああ…な、なに…やって…」

ズシャ

また皮膚が切り裂かれる音がした
肩から斜めに切り裂かれたみたいだ

亮「あ…」

ドサッ

俺は地面に倒れ込んだ

幽& a m p ; 文& a m p ; は「亮太! !」

亮「だ、だいじょぶだつて…ゴフッ…あれ? 目の前が霞んで…」

紫「死なさないわよ。早く永遠亭に」

亮「ゆ…かり…?」

霞む目で見えたのは紫の姿だった

その中で赤い目をした妖夢が斬りかかっていた

紫「消えなさい」

紫が腕を振るった瞬間妖夢が消えた

何故消えたのかは自分の意識が無くなっていたから聞けなかった

どこだこ…

真っ暗な闇の中で俺は立っていた

「やめてください!!」

声が聞こえるが姿は見えない

「貴方達の目的はなんですか!？」

この声…

その時殴られるような音が聞こえた

「ぐっ……助けは…来ない…のかな……助けて…亮太…」

亮「妖夢!？」

それと同時に布団から目覚めた俺
相等大きい声といきなり起き上がったからか横にいた鈴仙が飛び上がった

鈴「び、びっくりした…起きたんですね。気分はどうですか？」

手首を見てみるとしっかりと治っているが違和感がまだ少しあった体の刀傷は綺麗に消えていた

亮「まだ違和感がある」

鈴「少ししたら慣れてきますよ」

亮「そうか。ところで紫は居ないのか？聞きたいことがあるんだが」

スキマから紫が現れた

紫「なにかしら？」

亮「まずは妖夢について知りたい」

紫「アレは妖夢ではないわ。別の所へ転移させて代わりを置いたのよ」

亮「じゃあ妖夢は…」

紫「そうね」

亮「…何故妖夢なんだ？」

紫「それはわからない。一応場所は特定しているわ」

亮「流石だな。でも何かあるんだな？」

紫「そうね。結界が張ってあるわ。壊してしまったら空間が不安定になって大惨事になる」

亮「じゃあどうやって」

紫「結界を保護している奴等を倒し結界の四隅にある印を同時に消す」

亮「保護している奴等って」

その時弾幕が飛んできた

それを全て刀で防ぐ

亮「鈴…仙…？」

鈴「アハ…アハハハハ！！」

狂気に満ちた笑い声が響いている

亮「！！まさか…」

紫「そのまさかよ。奴等が守護者よ。幸い本人よりは能力は落ちるわ」

亮「そうなのか…よし。本人じゃないなら問題なく斬れ…ヒュン…る？」

目の前の鈴仙に矢が刺さる。

俺の頬には一筋の傷ができてしまった

亮「いった…おい永琳！！危ないじゃねえか！！」

永「大丈夫よ。それくらい」

後ろには弓矢を構えた永琳が立っていた

亮「それより…何時死ぬんだコイツ？」

と言いながら偽鈴仙を真つ二つに斬る

鈴「ハハハ…ハハハハハハ！！」

這いずりながらも此方に近づく
その敵を倒そうとする健気な行動は俺にとっては恐ろしいだけであ
った

紫「主人に忠実ね」

亮「お前のとこみたいだな」

紫は少し悲しそうな顔をして

紫「最近藍が冷たいわ……」

亮「……………おい！！それよりどうすんだ！！」

紫「粉々にしたら？」

亮「お前の力で大丈夫だろ」

紫「私が居なかったらどうする気？」

亮「知らねえよ。居るから言ってんじゃん」

永「2人とも息絶えたみたいよ」

紫「ほら亮太が話しているから……」

亮「紫だつて悪いじゃねえか」

目の前の息を引き取った偽鈴仙の死体は砂みたいになって消えていった

亮「なあ。やっぱり他の奴も…」

紫「多分そうね。今調査をしてもらっているわ」

そこに藍と文とはたてが来た

調査はこの3人に任せていたのか

藍「現状を報告します。幻想郷の小さい子を中心に拐っているようです」

文「まあ…正確に言うと…幼女や少女のかわいらしい子達を拐っている…ということよ」

文が真剣な顔をしている
文もあんな顔ができるのか…

は「その子達はもういない。代わりにあの守護者が置かれているわ」

亮「女の子中心って訳か…本当に小さい子が好きみたいだな。ロリコンだな」

文「人のこと言えないでしょ…」

亮「なっ！……俺はただ子供好きただけだ……！」

文「はいはい」

紫「そんなことはどうでもいいわ。これからどうするの？」

亮「１つ１つ探すしかないだろ。手分けして倒して行くか？」

紫「そうね……」

こうして俺達は何人かに分かれて行動することになったんだが

文「さあ、行きましょ」

亮「寄りによつてお前かい……」

くち引きのけっかなんだけどな

文「まあまあ。さあ、行くわよ」

亮「はあ……ところで今は誰彼構わず女の子が拐かされているんだな」

文「そうね。紫の創った結界の中に入っている人達には何の問題もないわ」

亮「で…取りあえず人里に向かってんだな？」

文「そうよ」

俺達のいる道の少し向こう側に霊夢さんがいた

亮「流石博麗の巫女だな。異変解決の為に動いてんだな」

霊夢さんに向かって走っている俺

文「亮太！！下がちなさい！！」

亮「え？」

いきなり霊夢さんが振り向き

霊「クフフ…クフフフフフ」

亮「おわ!？」

マジかよ…霊夢さんまでもが…

文「亮太!!行くわよ!!」

亮「仕方ないな…わかった!」

いくら本人より能力は劣るといってもやはり強い

亮「夢想封印!？」

文「そんなもので!!」

夢想封印を避けつつなんとか近づく

亮「沈め!!」

ずっと前に紫から貰った刀を取り出す
長さ、重さ、形と言ったものが無く自分の思った通りに変えること
ができる
なんというズルい剣なんだ…

亮「剣技『安息への導き』!!」

軽い剣に変えて倍以上の速さで相手に近づき相手の首をとばす

霊「クフフフ…クフ…フ……………」

息絶えたみたいだ
砂みたいになって風に流れた

亮「終わった…」

文「巫女が拐われるとわね」

亮「転送装置が在ったとすれば多分賽銭箱に付いていたんだろうな
…」

文「まあ…今は先を急ぎましょう」

亮「ああ」

人里近くまで来た……と思う
何故思っかって？

だって人里が無くなっているから…
そこに1つの人影があつた…慧音だ

亮「慧音！！」

慧「！！」

亮「無事だったか！！」

慧「亮太？本物の亮太なのか？」

亮「何言っ…って！うおっ！？」

慧音が体当たりしてきて俺が押し倒された感じになってしまった

文「あー。浮気してますね」

文がカメラを構えて撮してきた

亮「やめ！！撮るなって！」

慧「亮太ー！」

亮「や、やめ…頭押し付けるな！！いた、痛い！！！！離れろ！！！」

慧音を引き剥がして慧音と向き合った

慧「やっぱり本物は違うんだな。ずっと偽者と戦ってたから…もう私以外居ないんじゃないかって思ってた」

亮「……そうか……ところで村が消えてるんだが」

慧「ああ。私が消しているんだ。今は危険だからな」

亮「そうか。それならいいんだ。慧音も一緒に来ないか？一人よりは楽だと思うぞ」

慧音は頷いて肯定の意を表した

亮「よし。紅魔館に行くぞ。彼処の姉妹が心配だ……」

文「ロリコン……」

亮「お前…殺すぞ……？」

文「ゴメンナサイ」

取りあえず俺達は紅魔館の入口に来ていた
相変わらず美鈴は寝てる
だから勝手に入らせて貰った

玄関に入った時、目の前に突如咲夜が現れた

咲「あら？珍しい面子ね…お嬢様に御用かしら？」

亮「ああ」

今の様子からレミイはまだ捕まっていないみたいだ
咲夜に何時もの所に行かされた

慧「今の状況は危険なのか？」

亮「なーに。結界破つたら速攻だ。そんなにヤバくねーよ」

慧「そうか…」

そこにレミイが現れた
欠伸をしながら来たので寝起きというのがすぐにわかった

レ「ふわぁ〜……うーん…何よ…？」

亮「ああ。ちよつとな」

何故レミイは拐われていない…？
見張りが厳しいからか？
いや、やっぱり転送装置があるんだ

レ「突然なによ？貴方が私に用なんて珍しいわね」

レミイが椅子に座ろうとしていた
まさか……レミイが座る椅子にあるのか！？

亮「座るなレミイ！！」

レ「え？きゃっ！？」

俺は叫んでも座る様子を見せたので間一髪のところレミイを抱き
抱え別の方向に飛んだ

文「よし…バッチリ！！」

亮「また撮ったな！？」

レ「それより早く離しなさいよ！！」

亮「ああ。すまない。咲夜。レミイと同じ様な人形持っていないか
？」

レ「そんなもの有るわけ」「これで良いかしら?」「な!?!」

咲夜から貰った人形を椅子に座らしてみ
るとバチツと音をたてて人形が消えて何かに入れ替わっていた

亮「来たぞ!!」

「アハ! アハハハ!! アッハッハッハッハ!!」

レ「な、何よコイツ!?!」

亮「事情は後でだ!! 先ずはコイツを倒すぞ!!」

現れたのは偽者のレミイだ。

これでわかった事は、転送装置が有るって事だな

亮「レミイ!!」

レ「っ!! 私と同じ槍!?!」

「アッハッハッハッハ！！シネ！！シネエエエ！！」

レ「そんなもの！」

レミィの放った槍と偽者のレミィが放った槍が激突する。
偽者の力は劣るからレミィの槍が勝つと思っていた
だが

レ「うそ…そんな…」

咲「まさか…圧されている！？」

その瞬間、レミィに向かって偽者の槍が飛んでいく
間に合わない！！

亮「レミィイイイ！！」

バチバチッ！

見てみるとレミィは無傷で目の前にフランが立っていた

フ「大丈夫？お姉様？」

レ「フラン！？」

亮「フラン！話しは後だ！！先ずは「偽者を倒すんだね？」…察し
がいいじゃねえか」

フ「消えて…」

グシヤア…

フランのおかげで被害無く倒せた
レミイはこちらへ向いて

レ「何だったのよ！！アイツは！？」

亮「い、今異変が起こってんだよ。今から説明するから…」

俺は今までの経緯を全て話した
レミイは本当に驚いた様子を見せた

咲「貴方はこれからどうするの？」

亮「俺は…「た、助けてくれー!!」は？」

パ「ま、待ちなさい!!逃げても何も変わらないわよ!!」

パチユリーと魔理沙が走ってきた。

魔「ちょ、ちょうどいいところに!皆!!手伝ってくれ!!」

「ウフフフフフ…アハハハ!!」

亮「今度はフランかよ……」

慧「そんなこと言っている暇は無いみたいだぞ!!」

文「来る!!」

亮「やっべ…相当キツイぞ」

長時間に渡る死闘は皆にとってもキツかった

フ「私と…同じくせにiiiiい!!」

亮「フラン!？」

フランが偽者に近づき頭を掴む

フ「吹き飛べ!!」

亮「止める!!」

「ウフフ…一緒にキエルノ?じゃあ…一緒に……」

偽者もフランを掴む。

ヤバイ!!ヤバイ!!

動けよ体！！

亮「くっそおおお！！」

レ「消えるのはお前だ。それが運命だ」

「な……に……」

偽者の手がフランから離れる
その後ろにはレミイがいた

フ「お姉様……」

レミイがフランを抱きしめた

レ「無茶しないで……」

何か近づけない雰囲気だったので偽者の近くまで来ていた

「私……負けたの……？もう……戻れないの？……」

亮「おい。何でお前は消えないんだ？」

「うつ…ぐすつ…うつ…イヤ…だよ…死にたくないよ…ぐすつ」

何だ何だ？

様子がおかしすぎるぞ

コイツはなんなんだ？

「助けて…お父さん…お母さん…亮太お兄ちゃん…」

亮「お、おい」

「あれ？何だか目がボヤけて…幻聴かな？亮太お兄ちゃんの声が…」

亮「おい！！逝くな！！どうすれば…」

「さよなら…み…んな…」

彼女は生き絶えてしまった…

慧「亮太」

亮「ああ、慧音か…。たった今分かった事がある」

慧「分かった事？」

亮「偽者の中には……いや…原型は連れ去られた女の子達で構成されている」

慧「何！？」

亮「最後だけ声が戻っていたが…知っている声だった」

慧「そうか…文」

文「どうしたの？」

慧音は文に説明をしていたので俺は咲夜のもとに向かった

亮「咲夜…」

魔「よっ!!」

亮「…魔理沙…いたのか？」

魔「酷いぜ!! 最初っからいたぜ!! それより教えてくれだぜ!!
何なんだぜ!? アイツら!!」

亮「わかった…わかったから落ち着いてくれ」

これまでの経緯を全て話した

魔「そうか…」

咲「……」

亮「どうした？」

咲「いえ。何でもないわ…それより安全な場所はあるのかしら？」

亮「あるには有るが…お前達が固まっても不安か？」

咲「不安ね。万が一ということもあるしね」

亮「ふーん…1つ思ったんだが…何故レミイを助けなかった。お前の能力なら余裕の筈だ」

咲「そ、それは…大丈夫だと確信出来たからよ」

何故だ？さっきから咲夜の様子が変だ

亮「そうか…じゃあ咲夜。アレ持ってきてよ。疲れたから」

咲「ア、アレ？…わ、わかったわ。任せて」

取り合えず待つとしようか…
一瞬で姿を消したが…

咲「持ってきたわ」

亮「来たか…ありがと…よー！」

俺は咲夜を殴り飛ばした。レミイが驚きこちらに来る

レ「な、何をしているの！？何故咲夜を！？」

魔「わかったぜ。亮太」

魔理沙が八卦炉を咲夜に向ける

俺は刀を構えて魔理沙に向かって頷いた

咲「な、何故！？」

亮「ほらほら。早く起きろよ偽者」

その場にいた全員が戦闘体制をとった
俺はフランを呼んだ

フ「どうしたの？」

亮「ちょっと待ってる」

咲「な、何故バレた！？完璧だった筈だ！！」

亮「残念…お前の行動で全てわかった。俺はアレなんて頼まない。そしてレミイを助けなかった咲夜はおかしすぎる。誰かがやるだろうみたいな考えではない。もういいな。じゃあ…ソチラ側の情報を「ひい!？」貰うぜ。フラン！右足だ!!」

「ぐわあああ!？」

逃げようとした咲夜の形をした何者かの右足を砕く
グキヤという嫌な音が響いた
転けた相手の首根っこを掴み刀を向ける

亮「さあ。吐いてもらおうか？吐かなきゃ…殺るよ…」

「ひい!!や、止める!!」

亮「言うのか!？言わないのか!？はつきりしろ!!」

腹に少しだけ刀を刺す

相手は苦痛の表情をしている

亮「アハハ!!良いね!!その表情!!言わないんだろ!？言えないんだろ!!アッハッハッハ!!」

魔「り、亮太？」

亮「もっと喚け！！もっと叫べ！！ほらほらほらほら！！」

さらに深く刺す

「ぐああああ！！」

もっと深く刺していく

その時手を止められた

掴まれたというよりは抱きつかれた感じだった

フ「止めて」

亮「邪魔するのか？コイツは皆を「いいから！！」……………」

剣を引き抜く

亮「さあ言え！！お前らの親玉は誰だ！！目的は！！」

「す……ず……さ……ま……す……みませ……ん……」

亮「おいおい！！待てよ！！」

フ「止めてよ！！そんな亮太…見たくないよ…」

亮「！！…ゴメン…ここからは一人で生存者を探す…後のことは頼んだ」

こうして皆と別れた俺は一人で次の場所へ向かった

幽「で？逃げて来たってわけ？」

亮「うるせえ幽香…ってか何で付いてくるんだ？」

そう、次に行こうとしている途中で幽香に出会ったんだ

幽「面白そうだからよ。それにこの子も連れていくからね」

日傘を持っていない手でメデイスンを出してきた

亮「これはまた懐かしいな…久しぶりだなメディ」

メ「う、うん。久しぶり…」

亮「取り合えず妖怪の山を目指すけど…ついてくるのか？」

幽「ええ。面白そうだから」

メ「私も。2人と一緒の方が安心するから…ついていてもいいかな？」

亮「ああ。大丈夫だ。俺も2人がいてくれて方が頼もしいよ」

メ「あ…う、うん！」

少し照れくさそうな表情をしたその横で幽香が

幽「はあ…仲間が必要なら戻ったらいいのに…」

と言われた

亮「ははは…」

あんな姿を見せて一緒に居られるわけ無いだろ

幽香には一度見せた事があるからな…

ってことで妖怪の山に着いた

亮「静葉」

静「！だ、誰！？」

なんだ？この驚き方…なにかあったのか？

静「ほ、本物だよね…？」

幽「何かあったの？」

静「天狗達がみんな狂い出して暴れているんですよ！！」

亮「！やはりこつちもか！？」

幽「でもおかしいわ。天狗を狙うなんて」

亮「確かに…そういや…穰子はどうした？」

静「それが…途中ではぐれてしまつて…」

亮「まじか？ だったら探しながら行こう」

歩いていると天狗達が群がっているのが見えた

亮「くっ…なんかあるよな絶対」

幽「そうね。蹴散らすわよ!!」

亮「…………ちっ!! 仕方ない…のか…」

メ「動きが鈍くなつたよ!!」

亮「ナイス!! 敵への慈悲を…苦しむことはない……………」

数人を斬るがそれらは砂になり散つていった

亮「なんだ？ 何か違う」

幽「何ぼーっとしてるの!？」

残りを幽香が倒した

その天狗も直ぐに消えていった

亮「違う…血が出ていない…」

フランとは違って言語も理解していなかった
なら…空っぽの偽者もいるのか!
なら殺さなくてもいいんだよね…

幽「亮太!!聞いているの!？」

亮「うわっ!!す、すまん!!」

幽「まったく…敵もいるんだからしっかりしなさい!」

亮「あ、ああ。でも…奴らの中にも人間が混じってるんだ…俺は…
本当に斬れるのかな…って…」

幽「知らないわよそんなこと。あなたが斬れないのなら私が殺るわ」

亮「だが奴ら「だが何!？」…」

幽「もういいわ……………友人や知人を殺めなければならぬ時もあるのよ…」

亮「……」

暫く歩いていると

?「はあ!！」

上空から誰かが剣を振り降ろしてきた

亮「うおっ!?!っならあっ!！」

剣を受け止め弾き返す

相手は吹き飛んだが体制を立て直しまた向かってくるまた剣を横に振ってきた

それを受け流し斬りかかるそしたら相手も受け止めつばぜり合いが始まった

亮「誰かと思えば…子犬さんじゃねえか!!」

椀「誰が子犬ですか!!」

また離れて詰め寄る

何度か剣を合わせたあとつばぜり合いに戻った

椀「文様は最近貴方の周りにいてちつとも帰ってきません!!」

亮「俺に言われても困るな…」

椀「だからそろそろ文様を返してくれませんか？」

亮「悪いけどそれは俺じゃなくて本人に交渉してくれや!!」

椀「文様は私の言うことを聞いてくれません…だから!!」

亮「だからって…うわっ!？」

俺達の周りの地面が抉れているのがわかった
柊は後ろに引いていた

幽「…私はなにもしないわよ」

亮「違うの？じゃあ…」

文「……………」

亮「なんだなんだ？噂をすれば影が射すってか！！」

柊「文様！！」

亮「？」

文「ハアッ！！」

上空から猛スピードで急降下しながら蹴りをいれてきた

亮「速っ！？守る力よ！！」

剣を突き刺した回りに魔方陣が描かれ皆をまるく囲んだ

文「チイ!!」

亮「何すんだよ!!」

文「まだワカらないの?」

亮「な!?!」

「やっとわかつタンド…ジャア死ね」

一気に目の前に詰め寄られ蹴り飛ばされた

亮「ぎっ…!!」

さらに風の力で鎌鼬のように切り裂いてきた

幽「甘いわ!!」

幽香は防いだみたいだ

メ「きゃー!!」

椛「危ない!!」

メデイスンは椛が守ったみたいだな
だが俺はもろにくらっちゃまった…しばらく動けないかな

「アんだからだー!! 亮太!!」

亮「ふっ…殺ってみるよ…」

そのときに文の偽者は周りに風を吹き正面以外からの攻撃はさせないようにした

幽「これほどの力が!？」

メ「動けない…!」

椛「亮太さん!!」

亮「何が…文の偽者だ…所詮偽者じゃねえか」

？「その偽者にやられてるのは何処の誰かねえ……」

亮「お、お前……」

？「そりゃー!!」

偽者を切り飛ばした

「な、ナゼ!? ナゼ貴様が!!」

？「別にいいじゃないか……そんなこと」

その人は武器を肩に担いでダルそうな感じで返事を返した

亮「ビックリしたぜ……まさか助けに来てくれるなんてな……小町」

小「いや……ホント偶然ってのは怖いね」

「テキがヒトリ増えたダケダ!!」

幽「何処をみている？」

幽香が後ろに回り込んでいた

「あ……」

亮「そっちばかり気にしててもいいの……か……！」

文「グアッ……！」

俺は相手を殴り飛ばした

幽「止めだ……！」

幽香が止めを射そうとしていたのを止める

幽「何をする気だ……？」

亮「わかってんのか……？アイツは人げ……」

その時俺の目の前に偽者の首が飛んできた

亮「あ…ああ…小町いい!!」

小「済まない亮太…何が言いたいのかも知ってる。お前は絶対に止めをさせないと思ったから」

亮「っ…」

図星だった…

俺は生かしてどうにかしてあの子達を助けようとしてたん

どうにかして?

どうにかしてってなんだ? 助けても…意味がないじゃないか!!

文「お兄ちゃん…亮太お兄ちゃん」

俺ははっとして偽者顔をみる

亮「……」

「皆を…助けてね…」

亮「ああ…必ず…ゴメン…ゴメンよ…」

「ふふ…バイバイ…お兄ちゃん」

彼女は砂となって消えていった

亮「行こう」

メ「亮太…大丈夫？」

亮「ああ。ありがとうメディ」

メ「そう…」

？「ちょ…やめてって！！痛い痛い！！」

亮「無事で何よりだ」

？「だからって引つ張ることないでしょ！！」

亮「だってにとり呼び掛けに応じなかったじゃん」

に「だ、だからって！」

椀「良かったです。にとり」

に「ん？あ、椀。無事でよかったよ。文は？」

椀「……」

亮「アイツは捕まったみたいだな。さっきわかった…」

に「そっか…」

亮「とりあえず…神社に来たんだが」

幽「人氣が無いわね…」

静「あ、あれ！！見てください！！」

静葉が指を指した方向には地に伏せている早苗の姿だった

亮「早苗！」

早苗を抱き上げ起こす

早「ん…んん…あれ？亮太さん？」

亮「よかった…早苗何があつたか話せるか？」

早「はい。天狗の事は「ああ。聞いている」わかりました。こちらにも襲撃がありました。所詮は天狗…私達にとっては敵ではありません」

せんでした…だけど…倒した天狗から光が吹き出てきました…それが他の天狗にも…それで」

亮「光に囲まれて…」

穰「これ…ってこと？」

早苗はゆっくり頷いた

早「す、すみません…2人を見てきてくれませんか？」

亮「すまないが…2人はもう…」

早「そう…ですか…私が力不足ばかりに…」

早苗が泣いているのがわかった

やっぱり女の泣いている姿ってなんか慰めたくはなるけど傷つけてしまうかもって思うと苦手かな

は「亮太!!」

亮「はたて！？どうして！？」

は「大変なんだ！！紅魔館の皆が…消えてしまったわ…」

亮「なんだと！？」

は「紅魔館から連絡貰ってたけど急に途絶えたの……見に行ったら」

亮「誰もいなかった」

はたてが頷いて天子の所はもう確保できているから地底に行ってくれと言った

またも1人で来た俺かと思いきや

に「しゅっぱーっ！！」

亮「はぁ…緊張感のないやつ…」

に「でも1人か2人くらいは明るい人がいるでしょ！！」

亮「そんなもんか？」

に「そんなもんだよ!!……亮太は無理すぎるから……誰かが側にいないと……」

亮「なんか言ったか？」

に「何にも」

亮「そうか。入口に着いたが……大騒ぎだな」

？「……………!!」

亮「キスメ？」

キ「!!」

亮「何となくわかった……一緒に行くぞ!!」

キ「！！！！！！？」

に「ま、待ってよー！！」

天狗が邪魔をしてくるが蹴散らして下に進む

ヤマメの姿が見当たらなかったのでヤマメが淋しそうな顔をした

亮「あ！勇義！！」

勇「よう！！手伝ってくれないか！？」

勇義の周りにはたくさん天狗がいた

亮「せいや！！ついてきてくれにとり！！」

に「りようかい！！」

俺が剣を突き立てる

剣から魔方阵が描かれて全員を囲む

そこから水の龍を出し全てを包み込むように天狗を巻き込んだ

亮「& a m p ;に「守護水龍! !」」

その時には天狗は消えていた

亮「流石だな」

に「いい仕事するでしょ?」

亮「当然だ。しなければ帰ってもら_うぜ」

に「おお怖い」

勇「なかないな。それより早く行くぞ! !」

亮「おう! !」

幸い敵は勇義が食い止めていただけの数だったので奥は安全だった

亮「さとり…無事だったんだな」

さ「うつ…亮太さん…」

亮「他の奴らは？嫉妬姫はいるから他のだ」

パ「名前で呼びなさいよ！！」

亮「スマン…パルパル」

怒っているパルパルをなだめていたら
隣と空が抱きついてきた

隣「お久し振り！！」

空「たまには遊びに来てよね！！」

亮「ゴメンゴメン……」

亮「さとり？こいしはどうした？」

さ「それが…」

？「そりゃー！！」

亮「うおわっ！？」

こいしが後ろから抱きついてきた

こ「えっへっへー！！だってたまにしか来ないから久々だもんー！！」

亮「はあ…ま…皆無事で良かった。だから後は帰るだけだな。燐と空以外はなー！！」

剣を2つ抜いて燐と空の頭を貫く

さ「な！？（やはり彼の心が読めない！！なんで！？どうして！？
これでは彼の行動も読めない）」

燐「なぜ？」

空「ワタシ達の正体ガ」

亮「お前らにはわからないだろうな……」

「さすがお兄ちゃん…頑張ってね」

彼女達は砂となって消えていった

亮「帰るぞ」

紫「おかえりなさい」

亮「ただいま」

燐「大変だよ！！大変なんだよ！！」

？「おかえりなさい。こちらは大変でした…」

亮「聖…」

聖「彼女達なら大丈夫だと思っています。ですけど…」

星「大丈夫ですよ」

亮「よう！…ドジっ虎！！よくもチョコに辛いもの入れてくれたな
」

星「い、いや！…アレはわざとじゃないよ！…！」

亮「わかってるよ！…紫…準備は？」

紫「出来ているわ。じゃあ行きましょうか」

俺達は結界の前まで来ていた

紫「では四手にわかれて合図でこの術式を使って」

亮「ああ、わかった」

何人かに別れた

亮「合図だ!!」

術式を展開して結界にぶつける
すると、結界が割れた
みんなは中心に集まった
目の前には門みたいな入口が広がっている

紫「ここからは何が起こるかわからない…だから各自警戒を怠らないで」

そして、入口へと入った
そこは中庭みたいだった
次の瞬間警報がなりだしたと同時に数えきれない程の天狗が現れた

紫「亮太!! 貴方だけでもあの施設に入って!!」

亮「わかった!!」

全速力で走る俺のカバーをしてくれている皆
そのおかげで施設に入る事が出来た

先ずは天狗を量産している場所を探さなくては!!

「侵入者発見：目標を駆逐する」

亮「邪魔なんだよ!」

亮「はぁ…はぁ……ふー…何とか見つけたか…」

その部屋は意外にも警備はいなかった

亮「正解…だよ…な?にしても機械だけしかないなんてな」

俺は頭上からの殺気に気づいて横に飛んだ
俺がいた所は跡形もなく消えていた

亮「なんだよ…やつは居るんじゃないかよ…邪魔すんなって…あ、
アンタは!？」

そこに立っていたのは行方を眩ました師匠…魂魄妖忌だった

亮「な、何でこんな所に…!？」

妖忌「……」

無言で刀を構えてきた

亮「何がしたいんだよ……アンタは!！」

剣を構えて向き合う

先手をとる!!

亮「はあ!!」

妖忌「……ふんっ!!」

近づくことすら出来ず吹き飛ばされ壁にぶつけられる

亮「あがつ!!……げほっ!!げほっ!!」

妖忌「……弱い……」

亮「……くそっ!!何やってんだよ……今まで何してたんだよ師匠!!」

妖忌「答える必要はない……」

亮「現世斬!!」

妖忌「ワシが使っていた技をそのまま使っているのか愚か者!!」

いとも簡単に受け止められる

亮「チイツ!!……アンタは……何で……!!」

妖忌「……ゆ……せ……亮太……」

亮「え？」

妖忌「ぬん!!」

横薙ぎをしてくるが間一髪で避ける

亮「あぶね!!…って…おわっ!？」

師匠の腕が触れた瞬間圧迫感を感じた

妖忌「まだ…やるのか…？」

亮「っ……まだまだ!!アンタに聞かなきゃならない事がたくさんあるんだ!!」

妖忌「ならば…ワシを倒してみせい…」

亮「呼吸を…あわせろ……総てにあわせろ……」

妖忌「……ふんっ!!」

またも横薙ぎをしてきた師匠
だがその手には剣を持っていなかった

気づいた時にはもう遅かった
剣は、上に投げられていて横薙ぎの右手はフェイント…残りの左手
剣を降り下ろしたらしい

亮「いづつ…!!……ふう……」

今だ!!

さつき仕掛けた半霊を使って師匠を動けなくする
師匠を蹴り上げて半霊とともに近づき斬ろうとせずに殴り飛ばす

妖忌「っ!!」

亮「チェックメイト!!」

師匠の首に剣を突き立てる静かな時間が流れている
俺は刀を鞘に納め機械の動力を壊そうとした

妖忌「…何故…止めをささん？」

亮「あのですね…貴方は私の師匠なんですよ。それに……あの子が喜ぶ筈ですよ」

妖忌「…ワシはまた裏切るかもしれないぞ？」

亮「その時はなんとでも貴方を助け出します。機械つてわかんね……にとりがいたら大丈夫なんだが…まあいいや。はあ！…」

手に魔力を込めて殴りとばす
すると…プスプスと音をたてて電源は落ちた

亮「よしっ！…！」

「ウゴクナシンニユウシャ！…！」

亮「げえ！…！」

構えをとったが俺の目の前に師匠が歩いてきた

亮「師匠？」

妖忌「ここはワシが切り開く亮太…突き進め！」

亮「師匠…ありがとうございます！！死なないでくださいよ！！」

師匠が敵を薙ぎ払ってくれたおかげで越えることができた

妖忌「死ぬな…か…容易いことよ」

亮「……生きててくれてよかった…また、助けられましたね」

俺は牢屋の場所へと走った数分後牢屋の扉を見つけた勢いよく扉を開けて中を見る

亮「お前ら無事か！？」

「「「「亮太！！」」」」

亮「無事のようだな…今助けてやるから下がってるよ。せいっや！
」

全ての檻を斬って外す

文「ありがとう亮太」

亮「いいさ。それより外に皆いるから助けに行ってくれ！！」

俺は皆を逃がしてから妖夢を探すがどこにもいない
仕方なく牢屋の外に出ると妖夢がいた

亮「おわっ！！居るなら言えよ！！」

妖「…うん」

亮「あー…えっと…」

妖「こっち」

妖夢が走り出したのでそれに付いていくと大きな扉の前に来ていた

妖「敵の陣地」

亮「なら行くか!!」

おもいつきり扉を蹴破り中に入った

亮「よーやくご対面だな」

？「誰だい？ああ。例の侵入者達の一人だね」

亮「そうだ…アンタを殺りに来た」

？「あ？ぷっ…あっはっはっは!!君一人でかい!？」

亮「はっ!!一人で十分だぜ!!って一人じゃないけどな!!」

？「ふっ…僕はすずだよ」

亮「名乗ってくれるのかよ…行く…ぜ？」

腹に痛みが走った
腹部に目をやると剣が貫かれていた
後ろに敵がいたのか
後ろに首だけ向けると妖夢しか居なかった
俺は膝について横に倒れた…
最悪の展開を考える時間もなかった
何故だ？

亮「うつ…ってえな…」

妖「…」

す「よくやったよ。妖夢ちゃん」

なんだって？

妖「…え？…義兄…さん？え？私の…剣？どうして…義兄さんの…
…い、いやああああ…！！！」

す「どうしたんだい？前から殺したかったんだろ？」

妖「違う！！わ、私は！！殺したくなんか！！」

どういうことなんだ？
わけわかんねえ

す「僕はなにもしてないよ。殺ったのは君自身なんだから」

亮「そう…だったのか……そいつは済まなかったな…」

妖「違う！！違う違う違う違う！！うわああああ！！」

妖夢が楼観剣を持ちずすの前に走っていく
だがずすの目の前で立ち止まりこちらを向いた

妖「な、何をした！？」

す「なーに。さっきのは君に意識が無かったけど次は意識がある状態で殺ろうね？」

妖「嫌だ！！やめろ！！亮太よけてえええ！！」

動かねえよ…もう意識も無いのによ…

亮「俺は好きな人に殺されるならまだましだと思ってる」

妖「バカ亮太あああああ！！」

剣先はもう直ぐそこにあるその時入口とは反対側に位置する場所が
消し飛び大穴から人影が現れた

？「いいや」…脆い壁だな」

亮「魔理沙？」

魔「お、亮太！！なにこれ修羅場？」

亮「ふっ…この状況でそんなこと言えんのな」

魔「冗談冗談。ほらよ」

魔理沙が傷薬をもらった
一目で永琳の物だとわかった

亮「ふえ…あめえよこの薬…良薬じゃねえのか」

す「な！？傷が一瞬で！？」

驚いているすずを他所に師匠が入口を斬って入ってきた

亮「うえ…」

妖忌「大丈夫か？」

亮「な、なんとか。くそっ！！妖夢！！こっちにこい！！」

妖「体が動かないよ！！」

亮「しかたねえ！！魔理沙！！隙を作ってくれ！！」

魔「まかせろだぜ！！」

マスタースパークを放った魔理沙
すずが下がった所を空かさず一太刀入れた

妖忌「亮太!!」

亮「師匠!!」

妖忌& a m p・亮「二連・風神!!」

師匠が近くに来て一緒に斬激をクロスになるように飛ばす

す「ぐうつ!?!貴様らあああああ!!」

すずなんかバカでかい剣を出してきた約二メートルちょいぐらいかな

亮「ありがとう二人とも!ここからは俺がやる」

魔「おいおい…水くさいぞ亮太」

妖忌「すまんが。ここはアイツに任せてやってはくれぬか?」

魔「へ?い、いやまあ良いけどさ…」

す「いくぞおお!!」

亮「こい!!」

さすが先手をきつてきたそれを受け流し鞘で殴る

亮「お前の目的はなんだ!? 言ってみろ!!」

す「僕は!! ただ女の子と」

亮「じゃあなんでその女の子を使って俺達と戦わせた!? 死なないとでも思っていたのか!!」

す「違う!! そんなつもりじゃ!!」

亮「そんなつもりじゃなんて通用するわけねえだろうが!!」

頭突きをしてすずを怯ます

す「うぐう!!」

亮「お前は何者なんだ…どうして彼女達を自分のモノにしようとしたんだ」

す「僕はただ同じ体格の友達が欲しかっただけだ」

亮「バカか！？そんなんで友達ができるわけねえだろうが！！」

す「うるさい！！お前に僕の気持ちが」

亮「わかるわけねえだろ！！もういい…友達の命を軽く投げ捨てる奴に友達を名乗る資格なんてない。お前のせいで俺の友達が傷ついた…お前を生かしてはおけない」

す「い、いいよ。や、やってやるよ！！本来の目的を達成するまでだ！！お前達！！」

すずの後ろにいた天狗達がすずの前に集まってきた

亮「…下衆が」

す「どうだい！？手も足も出ないだろ！！」

すずの元に歩いていくと天狗達が身構えた

亮「ゴメンよ…苦しかっただろ？」

天狗の頭を撫でてやるとその無表情の顔に涙が流れていた

「お兄ちゃん…」

す「な！？」

周りの天狗達も涙を流してその場に倒れた

す「な、何をした！？お、おいお前達！！」

亮「安心させただけだよ。さあ殺ろうか正々堂々一騎討ちだ」

俺が断命剣を構えすずの出方を待つ

す「うおおおおー！！」

銃みたいなモノを出して大声を上げて光線を撃ってきたがそれを避ける

連射してきたので紙一重で交わしながら近づいていく

す「何故だ！？何故当たらん！！」

亮「実力の差だよ！！」

刀を横に振り抜く

すずは剣で受け止めたが吹き飛んだ

す「ちいっ！！くらえ！！」

宙返りながらまた銃を構えた

飛んできた光線を避けることなく剣先だけで受け流した

す「う、嘘だ！！」

亮「もう…終わりか？」

す「クソがああああ！！！！！！」

剣を振ってくるすずだが太刀筋が荒く簡単によける

亮「隙あり」

蹴りで相手を怯まして顔面を殴って吹き飛ばして壁に激突させた

す「くそっ！！こっちにこい！！」

妖「きゃあ！？」

亮「！！妖夢！！」

妖夢を盾にして俺を見てくるすず

す「どうした！！かかってこいよ！！その代わりどうなるかわかってるよね！！」

亮「くっ……」

なんて古典的な人質の取り方なんだ…
だが攻撃するわけにも行くまい

す「ほらほら!!」

亮「ぐあっ!!」

さすが調子に乗っているみたいだな

妖「亮太!!」

す「おっと逃げようとしたって無駄だ」

妖「くっ!! 亮太!!」

亮「うるせえって大丈夫だ」

剣を取り出してに突き刺すこれは考えがあつての行動だ

す「はっ！！ついに諦めたか！！」

亮「……」

す「死ねえええ！！」

す「ずが突っ込んできた

亮「バーカ」

刺した剣をすずの下の地面から剣先をだし足を貫き動けないようにする

この剣は自由に長さを変えられる紫からもらったものだ

す「な！？ぐあっ！！」

亮「うおおりやあああ！！」

断命剣ですずを刺して妖夢を解放できたのを確認してそのまま壁まで走っていく

す「クソがああああああ！！」

亮「うおおおおお！！そのまま…ぶっ飛べええええ！！！！！」

壁がミシミシ音を立て亀裂が入り壁が割れて外に出した

亮「土よ！！！」

土を操って敵を固めて浮かす

亮「終わったな。さあ…本当の目的をしゃべってもらおうか」

す「幻想郷の乗っ取りだよ…お前が…亮太という立ち位置が羨ましかっただけだ…」

亮「お前は外から来たのか？」

す「ああ。急にね…あーあ…どこから間違っただろうかな」

亮「はっ！！最初っからだろうな」

す「ただ僕は幻想郷で幸せに過ごしたかっただけだった」

亮「だがお前は道を踏み外した」

す「だけど…もし…踏み外さなかったら…幸せに過ごせたのかな」

亮「お前はただ間違えただけなんだ。だからって許しはしない」

す「いいよ。好きにしてよ。もう好きな幻想郷を汚したくないんだよ」

亮「生まれ変わってからまた来い」

す「うん。覚えていたらね…」

断命剣を翳して生命を断った
痛みのないように

少し佇んでいると後ろから抱きつかれた

亮「おっと……妖夢か」

妖「……」

亮「お帰り」

妖「ただ…いま…あの人は？」

亮「アイツは死んじゃったよ」

妖「あの人…何時も悲しそうだった…多分心では泣いていたのかも…」

亮「そうかもな…だが」

アイツはやってはいけないことをした

妖「だが？」

亮「ん？…いや…なんでもねえよ」

妖忌「亮太」

亮「あ、師匠。約束守ってくれましたね」

妖忌「ふっ…あれくらい容易いものだ」

亮「そうっすか」

妖夢が俺が話している相手を見て驚いていた

妖「お爺様!？」

妖忌「しっかり役目は果たしているか？」

妖「は、はい」

亮「でも今回は不覚だったな」

妖「で、ですがアレは…!!!!」

亮「言い訳だよ」

妖「むっ……」

妖夢が膨れた

入り口から皆が現れた

紫「…終わったのね」

亮「ああ。終わった」

紫「じゃあ帰りましょうか。あと妖忌久しぶりね」

妖忌「ああ。世話になったな」

亮「え？2人って知り合いだったの！？」

紫「ええ。貴方が幽々子に拾われる前からね」

亮「ええええええ！？知らなかったの俺だけ！？」

紫「そうよ」

これで異変はまた解決できた
たまにはゆっくりしたいな…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8694t/>

東方 ある家系からの幻想入り

2011年10月14日19時52分発行